

平成8年度
加茂市内遺跡確認調査報告書

丸潟遺跡

鬼倉遺跡

馬越遺跡

蚊口太遺跡

寺屋敷跡

馬寄遺跡

1997

新潟県加茂市教育委員会

平成 8 年度
加茂市内遺跡確認調査報告書

丸潟遺跡

鬼倉遺跡

馬越遺跡

蚊口太遺跡

寺屋敷跡

馬寄遺跡

1997

新潟県加茂市教育委員会

序

我が加茂市は栗ヶ岳を水源とする加茂川の清流が市中央部を流れ、多くの遺跡がこの加茂川に沿って存在し、現在、約160遺跡が確認されています。これらの中で発掘調査が実施され、遺跡の内容が明らかになったものはそれほど多くはありません。それは、裏返せば多くの遺跡が土中で守られていることもあります。本来、これらの遺跡は後世に引き継ぐ文化遺産として、そのまま保存できれば良いのですが、いろいろな開発によりやむを得ず発掘調査を実施し、いわゆる記録保存という形で後世に残ざるを得ないケースがあります。加茂市においても例外ではなく、開発による遺跡の取り扱いが検討課題となってきております。

加茂市では、各種開発の事前調査として国・県の補助金を得て、遺跡確認調査を実施する事業を平成7年度からスタートさせました。いろいろな工事によって破壊が免れない遺跡を対象に行っています。今年度も七谷、加茂地区を中心に6遺跡が調査の対象になりました。七谷地区の蚊口太遺跡からは約4,500年前の縄文時代中期の土器が、加茂地区的各遺跡からは古墳～平安時代の遺物が出土し、各地区の歴史を雄弁に物語る貴重な遺跡が存在することが明らかになりました。これらひとつひとつの遺跡は全国的な視点から見て驚くような発見ではないかも知れませんが、その地域に根ざした個性豊かな顔を持ち、私たちの地域史を豊かに描きだす貴重な財産あります。また、それらは私たちの現在と過去を繋ぎ、未来を展望する歴史的事実でもあります。

これらの調査結果から、工事着手前に本格的な発掘調査が必要と判断された遺跡もありました。この発掘調査は遺跡を考古学的にしっかりと調査を行い、写真や図面に記録し、最終的に本報告書として刊行することあります。その報告書が壊される遺跡を代弁する重要な資料のひとつとして後世に継承されます。

本書はこうした事業のささやかな報告ですが、地域の歴史を理解する一助となり、郷土愛を育み、遺跡保護のために活用されることを願います。多くの皆様方のご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

最後に、本事業に格別なるご指導とご支援をいただいた、新潟県教育庁文化行政課をはじめ、調査にご協力いただいた事業者、地権者及び工事関係者に対し、ここに厚く御礼申し上げる次第であります。

平成9年3月

加茂市教育委員会

教育長 土 佐 弘

例　　言

1. 本報告書は、平成8年度に新潟県加茂市内における各種の開発に伴い実施した6遺跡の確認調査の記録である。本事業は、「加茂市内遺跡発掘調査」として、平成7年度から実施しているものである。
2. これらの調査は、丸湯・鬼倉・馬越遺跡が国道403号線道路改良工事に、蚊口太遺跡・寺屋敷跡が県営中山間地域農村活性化総合整備事業に、馬寄遺跡が民間開発に係わり、遺跡の取り扱いの事前協議資料を得るために実施したものである。
3. 確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
4. 調査は加茂市教育委員会が主体となり、実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教育長	土佐弘
総括		社会教育課長	田澤弘一
管理		社会教育課係長	土田孝次郎
庶務		社会教育課主事	塚野正明
調査担当		社会教育課主事	伊藤秀和
作業員	有本七次・泉田政広・小川豊作・加藤芳司・萱森茂雄・坂上ハツエ・坂上ヒロ・坂上豊司・佐藤昭一・茂野健太郎・高橋善雄・田下清治・長谷川善四郎・吉田倉平		

5. 本調査により出土した遺物や図面・写真などは加茂市教育委員会が一括して保管している。
6. 整理作業は坂上有紀、武田陽子、増井君子、山田昇、横山敦子の協力を得て伊藤が行い、本報告書の編集・執筆はすべて伊藤が行った。ただし、V 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に資料を委託し、同社より原稿を頂いた。
7. 図版1の空中写真は、(財)日本地図センター発行で、米軍が昭和23年11月に撮影したものを使用した。縮尺は約1/20,000である。図版3の空中写真は、(財)日本地図センター発行で、建設省国土地理院が昭和40年11月に撮影したものを使用した。縮尺は約1/20,000である。
8. 写真図版9の1右側の赤外線カメラを使用した写真是、新潟大学人文学部小林昌二先生から撮影頂いた。
9. 本書で示す方位は、第13図が磁北、それ以外は真北である。磁北は真北から西偏約7°10'である。
10. 本書に掲載した遺物は各遺跡毎に通し番号を付し、実測図と写真的番号は同一としている。
11. 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称省略・五十音順)
青山誠八 安藤正美 石坂圭介 石原正敏 大橋信彦 小田由美子 小野塚徹夫 春日真実 金子拓男 金子正典 北村亮 小林昌二 駒沢悦郎 坂井秀弥 笹沢正史 鈴木俊成 関正平 高橋保 高橋雅弘 高花宏行 滝沢規朗 田中靖 田村浩司 鶴巻康志 寺崎裕助 鳴海忠夫 長谷川昭一 藤田豊明 八百枝茂 加茂市シルバー人材センター (株)小柳建設 新潟県教育庁文化行政課 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

目 次

I 序 説	1
1. 平成 8 年度事業の概要	1
2. 遺跡の位置と環境	2
II 国道403号線道路改良工事関連	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 丸瀬遺跡第1次調査	3
(1) 発掘調査の概要	3
(2) 層序	3
(3) 遺構と遺物	4
(4) 調査のまとめ	4
3. 鬼倉遺跡	4
(1) 発掘調査の概要	4
(2) 層序	7
(3) 遺構と遺物	7
(4) 調査のまとめ	8
4. 馬越遺跡第1次調査	8
(1) 発掘調査の概要	8
(2) 層序	8
(3) 遺構と遺物	8
(4) 調査のまとめ	9
III 県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連	10
1. 調査に至る経緯	10
2. 蚊口太遺跡第1次調査	10
(1) 発掘調査の概要	10
(2) 層序	11
(3) 遺構と遺物	11
(4) 調査のまとめ	15
3. 寺屋敷跡	15
(1) 発掘調査の概要	15
(2) 層序	16
(3) 遺構と遺物	16
(4) 調査のまとめ	16
IV 民間開発関連	17
1. 調査に至る経緯	17
2. 馬寄遺跡	17
(1) 発掘調査の概要	17
(2) 層序	17
(3) 遺構と遺物	18
(4) 調査のまとめ	20
V 自然科学分析	21
1. 目的および試料	21
2. 分析方法	21
3. 結果および考察	21
VI ま と め	23
1. 平野部における遺跡調査から	23
2. 大谷地区における遺跡の分布について	23
遺物観察表	25
引用・参考文献	26

挿図目次

第1図	調査対象遺跡位置図 ($S = 1 / 100,000$)	2
第2図	丸湯遺跡土層柱状図	3
第3図	丸湯遺跡出土遺物	4
第4図	周辺の遺跡位置図 ($S = 1 / 25,000$)	5・6
第5図	丸湯・鬼倉・馬越遺跡確認調査トレンチ設定図 ($S = 1 / 5,000$)	5・6
第6図	鬼倉遺跡土層柱状図	7
第7図	鬼倉遺跡出土遺物	7
第8図	馬越遺跡土層柱状図	8
第9図	馬越遺跡出土遺物	9
第10図	大谷地区的遺跡 ($S = 1 / 25,000$)	10
第11図	蚊口太遺跡確認調査トレンチ設定図 ($S = 1 / 2,000$)	11
第12図	蚊口太遺跡土層柱状図	12
第13図	蚊口太遺跡17・30トレンチ遺構配置図	12
第14図	蚊口太遺跡出土遺物	13
第15図	蚊口太遺跡出土遺物	14
第16図	寺屋敷跡確認調査トレンチ設定図 ($S = 1 / 2,000$)	16
第17図	寺屋敷跡土層柱状図	16
第18図	寺屋敷跡出土遺物	16
第19図	馬寄遺跡確認調査トレンチ設定図 ($S = 1 / 4,000$)	17
第20図	馬寄遺跡土層柱状図	18
第21図	馬寄遺跡出土遺物	19
第22図	馬寄遺跡出土遺物	20
第23図	蚊口太遺跡赤色物質のX線回折図	22

写真図版目次

図版 1	丸湯遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡・馬寄遺跡周辺の空中写真、丸湯遺跡遠景 南から、調査風景、2トレンチ土層断面 西から、7トレンチ土層断面 西から
図版 2	丸湯遺跡出土遺物、鬼倉遺跡近景 東から、調査風景、2トレンチ土層断面 東から、5トレンチ土層断面 西から、7トレンチ土層断面 南から、鬼倉遺跡出土遺物(外)、鬼倉遺跡出土遺物(内)
図版 3	馬越遺跡近景 東から、調査風景、1トレンチ土層断面 東から、5トレンチ土層断面 東から、9トレンチ土層断面 北から、15トレンチ土層断面 西から、馬越遺跡出土遺物(外)、馬越遺跡出土遺物(内)
図版 4	蚊口太遺跡・寺屋敷跡周辺の空中写真、蚊口太遺跡遠景 北から、調査風景、調査風景、11トレンチ土層断面 南から
図版 5	14トレンチ土層断面 南から、17トレンチ土層断面 北から、21トレンチ遺物出土状況 西から、21トレンチ土層断面 東から、30トレンチ遺構検出状況 南から、31トレンチ土層断面 南から、33トレンチ遺構検出状況 西から、38トレンチ土層断面 西から
図版 6	蚊口太遺跡出土遺物
図版 7	寺屋敷跡遠景 西から、調査風景、2トレンチ土層断面 東から、8トレンチ土層断面 東から、15トレンチ土層断面 南から、寺屋敷跡出土遺物、馬寄遺跡遠景 北から、馬寄遺跡近景 東から
図版 8	調査風景、調査風景、4トレンチ土層断面 東から、5トレンチ土層断面 東から、7トレンチ土層断面 西から、9トレンチ土層断面 南から、10トレンチ土層断面 東から、12トレンチ土層断面 東から
図版 9	馬寄遺跡出土遺物

表目次

第1表	平成8年度発掘調査工程表	1
第2表	遺物観察表	25

I 序 説

1. 平成 8 年度事業の概要（第 1 表）

加茂市では、平成 7 年度から国・県の補助金を得て、埋蔵文化財が所在する区域およびその周辺部において開発計画がある場合、事前に遺跡の規模・内容を確認するための市内遺跡確認調査事業を開始した。本年度は第 2 年次目にあたる。昨年度は 2 事業に係わり、2 遺跡・1 遺跡周辺について調査を行ったが、本年度は昨年度からの継続事業である大谷地区の圃場整備などに伴い 6 遺跡を対象に確認調査を実施した。民間開発事業を除き、開発面積が大規模なため、複数年度にまたがり確認調査を実施している。

調査原因となった本年度の各開発事業は、従来から明らかになっていたものであったが、加茂市内の主に沖積地の分布調査が不十分で、埋蔵文化財の存在が注意されてこない状況であった。しかし、平成 7 年度に新潟県教育委員会主催の市内詳細分布調査が実施されるにあたり、当該開発事業地内に遺跡の存在することが明らかにされた。これらの結果から、国道 403 号線バイパス建設予定法線内の丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡とその周辺部について確認調査を実施する必要が生じ、用地買収済区域を対象に行うことになった。早期の調査が要望されたが、市教委は、舞臺遺跡の本調査を平成 7 年度末から実施しており、本調査終了後の対応となった。

その後、民間開発に伴い急きょ陣ヶ峰北遺跡の本調査を実施した。開発面積が狭く、圃場整備事業関係の調査が畠刈り後しか実施できないことなどから、実施可能となった。その後、圃場整備事業関係の調査については協議が進展しないことや、様々な要因から当初予定から大幅に日程がずれこみ、積雪間近の 12 月半ば以降～今年度内に蚊口太遺跡と寺屋敷跡の 2 遺跡について確認調査終了の予定が組まれた。しかし、蚊口太遺跡は予想外に遺跡の範囲が拡大することと、調査途中にて積雪期を迎えたことなどから、来年度に再調査を実施する運びになった。寺屋敷跡については、当初計画より遅れたものの、雪解けを待って確認調査を行い、3 月中には調査を終了した。さらに、民間開発関連の馬寄遺跡については、3 月上旬に確認調査を終了した。遺跡調査に当たっては開発側との協議や調査実施時期とも関連し、気象条件や滴水などの対応策が要求され、必ずしもよりよい条件下での調査ばかりが行えない状況にあるが、その中で一定の成果を上げることが今後とも求められるであろう。

遺跡名・調査次	遺跡の主な時代	平成 8 年 3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	平成 9 年 1 月	2 月	3 月
鬼倉遺跡	平安				—									
馬越遺跡(第 1 次)	平安				—									
丸潟遺跡(第 1 次)	古墳				—									
蚊口太遺跡(第 1 次)	绳文										—			
馬寄遺跡	古墳												—	
寺屋敷跡	中世?												—	—
本角瀬遺跡														
陣ヶ峰北遺跡	中世													

第 1 表 平成 8 年度発掘調査工程表

2. 遺跡の位置と環境（第1図）

加茂市は、新潟市の南方約30kmに位置し、新潟県のほぼ中央部にある。市域は東西に細長い形状を呈し、東西約17km、南北約8km、面積約133.67km²を測る。加茂川は栗ヶ岳(1,293m)を源とし、七谷地区で小乙川・高柳川・大谷川・西山川などの支流を合流させた後、谷底平野を抜け、市域を北西に流れ、信濃川に注いでいる。市街地は東山丘陵沿いから加茂川の扇状地形に展開し、続く沖積低地部へ拓がりを見せていている。該区域は越後平野の南部にあたるが、現行政区の加茂市域が越後平野に占める割合は須田地区を除くとそれほど広くない。

馬寄遺跡・丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡は市街地に近接し、表層地形区分上では扇状地～沖積低地部に立地しているが、加茂川や下条川、その他の旧河川によって形成された自然堤防や微高地状の地形に相当するものと考えられる。これらの遺跡周辺においても古代を中心とし、古墳～中世の遺跡が比較的多く確認されている。馬寄遺跡に近接した釜潤遺跡では、平成6年度に発掘調査が行われ、下層面に古墳時代前期、上層面に古墳時代後期を中心に近世までの遺構が検出されている。馬寄遺跡・釜潤遺跡から東約1kmに古墳後期の千刈遺跡が所在する。なお、馬越遺跡は下条川左岸の三条市との境界付近にあり、やはり周辺に古代の遺跡が多く確認されている。

蚊口太遺跡・寺屋敷跡は市街地から南東約8km、加茂川支流の大谷川流域に存在する。大谷川は上大谷に源を発し、左岸に段丘地形を形成している。段丘上には縄文期の遺跡が存在し、蚊口太遺跡もそのひとつである。段丘は小河川などによりいくつかに区切られているが、蚊口太遺跡が立地する場所が一番安定し、広い平坦面を有し、標高は約85mを測る。また、遺跡北側に大谷川、西側にその支流である折沢川によって区切られ、東方部にて山麓に連なり、北西方向に張り出した段丘地形を呈する。周辺に所在する縄文時代の遺跡は、明確な時期・詳細は不明であるが、丸山遺跡・初田遺跡・田中屋敷遺跡・草生津遺跡・伝湧泉寺遺跡・古見遺跡等、土器やフレークが採集されている。地形などから概して小規模な遺跡と考えられる。昨年度、草生津遺跡の一部分について確認調査が実施されたが、遺跡の中心部から外れた区域が対象となり、特に遺構・遺物は認められていない(伊藤1996)。寺屋敷跡は大谷川右岸の丘陵裾部に位置する。大谷地区の最奥部付近にある。周辺遺跡との関連性は不明である。



第1図 調査対象遺跡位置図 (S = 1/100,000)

II 国道403号線道路改良工事関連

1. 調査に至る経緯

一般国道403号線は新潟市を起点とし、長野県松本市に至る幹線道路であり、特に加茂市近郷においても北陸・磐越自動車道及び上越新幹線に連絡することから、産業経済のバイパス線さらには通勤通学等の生活道路として重要な路線である。現在の国道403号線はおおむね東北～南西方向にかけて加茂市内を縦断し、JR信越本線には並行して走っている。その交通は、近年の車社会の発達や重要な動脈であることなどから、渋滞・混雑を起こし、新潟県は抜本的な解消を目指した。昭和59年度に田上町の主要地方道村松田上線から三条市の一般県道塙野目代官島線にかけてのいわゆる三条北バイパス（全体延長8.3km）を4車線計画で事業が着手された。加茂川右岸の盛土工事が昭和63年度から本格的に開始され、平成6年11月には加茂川に架かる千代橋が供用開始された。そして、平成9年3月に村松田上線から加茂市的主要地方道長岡柄尾巻線に至るまで暫定2車線で供用開始が成された。

この間の埋蔵文化財の取り扱いについては、予定法線内に周知の遺跡がドットされない状況であったため、全く注意が払われてこない状況であった。しかし、平成7年末に新潟県教育委員会主催の詳細分布調査が実施されるに及び、法線内に大塚遺跡・丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡が存在することが確認された。また、大塚遺跡と丸潟遺跡の一部地内については、盛土工事が完了し事実上調査不可能な状況が、鬼倉遺跡地内についても約80cmほどの川砂が盛られ、本格的盛土工事を待つ状況が明らかになった。この状況をもとに、三条土木事務所、県教委、市教委、市建設課などで埋蔵文化財の今後の取り扱いについて協議を重ねた。そして、盛土工事が完了した部分についてはそのままとし、本格盛土工事未了地区を含めた延長約1.8kmの区間について確認調査を実施することになった。平成8年度においては、予定法線内の用地買収が終了したところのみを調査対象とし、残りの部分は来年度実施することとした。三条土木事務所は、平成8年4月1日付け三土第31、32、33号で鬼倉遺跡、馬越遺跡、丸潟遺跡地内における文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛に行った。市教委はその後、舞臺遺跡の発掘調査終了を待って6月から確認調査を開始する予定で準備を進めた。

2. 丸湯遺跡第1次調査

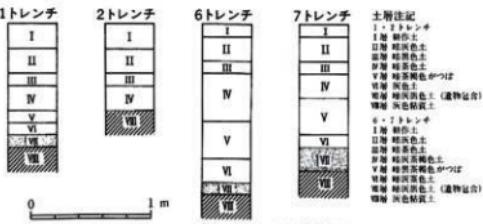
(1) 発掘調査の概要 (第5図)

調査は、用地買収が終了している道路工事予定法線内に任意の $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑を 0.3m^3 のバックホーで掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。遺跡推定地内および周辺部あわせ、約 $6,300\text{m}^2$ を対象にし、約 140m^3 を調査した。用地買収未了区域が多くあり、来年度以降に残りの区域を調査する予定であることから、第1次調査と呼称する。なお、調査 1トレーナー 2トレーナー 6トレーナー 7トレーナー 土層注記
対象地内の現況はすべて水田である。

(2) 層序(第2圖)

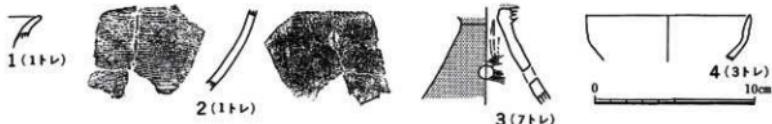
延長約450mを対象にした調査であることから、地点により異なる土層堆積状況であった。ここでは比較的まとまって遺物を出土したトレンチの土層柱状図を作成した。

まず、1・2トレンチであるが、1トレン



第2図 丸湯遺跡土層柱状図

3. 鬼倉遺跡



第3図 丸湯遺跡出土遺物

チでは暗茶褐色で腐植物を含むガツボ層の下位、地表下約90cmのⅤ層暗灰黒色土から土器が出土している。2トレンチではガツボ層が明瞭でないが、地表下約70cmの層位から遺物が出土した。6・7トレンチは同様な堆積状況が認められ、やはりガツボ層の下位、地表下約100~130cmのⅤ層暗灰黒色土から土器が出土した。1・2トレンチよりもガツボ層が厚く堆積し、より深いところに遺物包含層が形成されている。また、Ⅴ層は基盤層と思われる灰色粘質土で、非常に軟質である。

(3) 遺構と遺物（第3図）

34ヶ所試掘坑を設定し、かなり上部からの検出で流れ込みと判断したものも含め6ヶ所で遺物を検出した。遺構は調査面積の狭さや湧水などで明確には確認できなかったが、6・7トレンチにおける調査時の所見から、ピット状の円形の遺構が存在した可能性が高く、遺物も最も多く検出されている。遺物は、土師器がほとんどで、1~3・6・7トレンチ合わせて約80点ほどである。4トレンチから時期不明の漆器が耕作土から出土したが、流れ込みと判断した。出土遺物は細片が多く、図示できたものは以下の4点のみであった。

1は、変形土器口縁部片で、外反し端部は丸くおさまる。外面にススが付着している。2は、変形土器の胴部片と思われる。外面はミガキ、内面はハケメ調整が見られる。外面にススが付着し、胎土などから1と同一個体の可能性がある。1・2ともに1トレンチからの出土資料である。3は、器台の脚部である。ハの字状に開く脚部に径0.8cmの円形透かし孔が穿たれる。受部の形態は不明であるが、脚部外面および受部内外面ともに赤彩されるようである。7トレンチからの出土資料である。4は、器種は不明であるが口径10.2cmを測る口縁部片である。概であろうか。3トレンチからの出土資料である。

以上、僅少な資料から正確な時期は求められないが、赤彩された器台やハケメ調整された変形土器の存在から古墳時代前期の所産と考えられる。

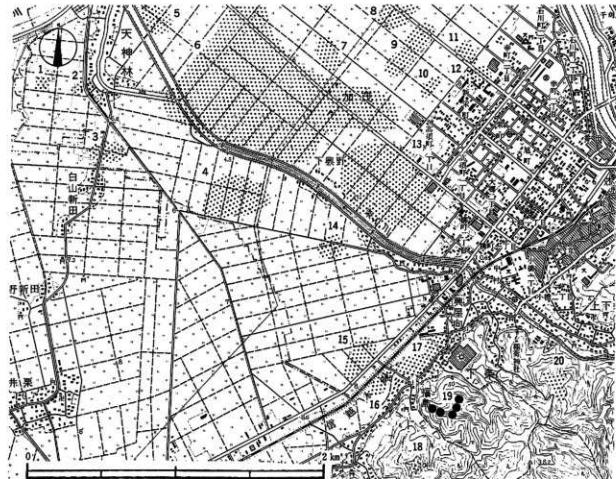
(4) 調査のまとめ

今回の調査は用地買収が不完全な状況の中で行われたこともあり、遺跡の範囲は確認できていない。ただ、遺物が地表下概ね1m前後下でガツボ層の下位から出土する状況は特徴的であり、沖積低地に埋まった遺跡の様相を反映しているものと言える。1・2トレンチ周辺と6・7トレンチ周辺には遺構・遺物の空白域が存在することから、6・7トレンチ周辺は丸湯遺跡とは切り離し、別の遺跡の存在も考慮したい。いずれにしろ、検出した土師器は古式土師器であり、古墳時代を下らないものである。これまでほとんど不明であった沖積低地における開発や旧地形などを把握する上で重要な遺跡と考えられる。来年度実施予定の第2次確認調査を待って、遺跡の拓がりを把握し、本調査必要区域などについて検討したい。

3. 鬼倉遺跡

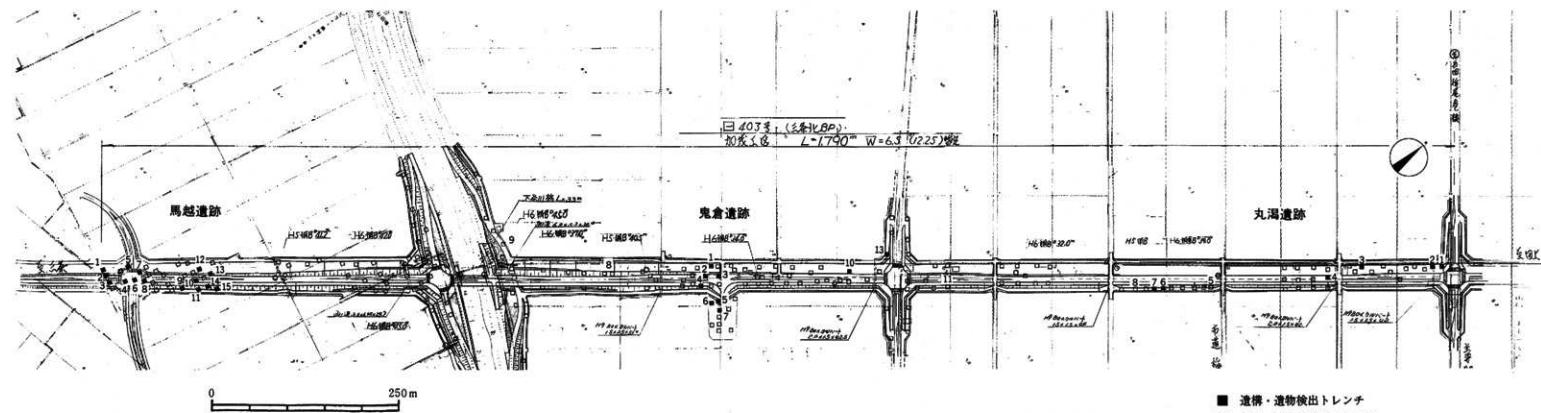
(1) 発掘調査の概要（第5図）

調査は、用地買収が終了している道路工事予定法線内に任意の2m×2mの試掘坑を0.3・0.4m²のバックホーにて掘削し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。遺跡推定地内および周辺部あわせ、約36,000m²を対



第4図 周辺の遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

1. 稲荷浦遺跡（古代）
2. 横土居遺跡（古代）
3. 西吉津川遺跡（古代）
4. 馬越遺跡（古代・中世）
5. 堀削遺跡（古代）
6. 鬼倉遺跡（古代）
7. 八反田遺跡（古代・中世）
8. 丸潟遺跡（古墳・古代）
9. 五反田遺跡（古代・中世）
10. 稲荷面遺跡（古代・中世）
11. 馬寄遺跡（古墳・古代）
12. 釜渕遺跡（古墳・中世）
13. 中沢遺跡（古代・中世）
14. 新堀遺跡（古代）
15. 山通遺跡（古代・中世）
16. 福島甲遺跡（绳文・古代）
17. 花立遺跡（绳文・古代）
18. 宮ノ浦古墳（古墳）
19. 福島古墳群（古墳）
20. 下条尋城山城（中世）



第5図 丸潟・鬼倉・馬越遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 5,000)

象にし、約420m²を調査した。三条土木からの要請で一番最初に調査を実施した。なお、調査対象地内的一部では約1m程の川砂を中心とした盛土工事が行われていたため、傾斜をつけた掘削方法で調査を行ったが、人間の背丈を超える深さになったことと崩落の危険性が高いことから上部から遺構・遺物の検出に留意するに留まった。鬼倉遺跡推定範囲は広大な範囲が指摘されており、本事業関係で最大の遺跡規模が想定されたが、関係区域の用地買収がほぼ終了しており、今回の調査において本調査の必要性の有無について判断が可能であった。

(2) 層序 (第6図)

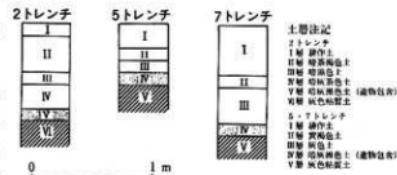
延長約600mを対象にした調査であることから、地点によつて異なる土層堆積状況が看取された。ここでは遺物を出土したトレンチが集中した地点の土層柱状図を作成した。

5・7トレンチは同様な堆積状況であるが、2トレンチにおいて若干の違いがある。しかし、いずれも地表下50~80cmの暗灰黒色土から遺物が出土し、遺物包含層を形成するものと考えられる。遺物を出土した1~7トレンチおよびその周辺のトレンチではガソボ層は認められないが、8~12トレンチなどではガソボ層が顕著に認められている。1~7トレンチおよびその周辺が微高地を呈していた状況を示すものと考えられる。

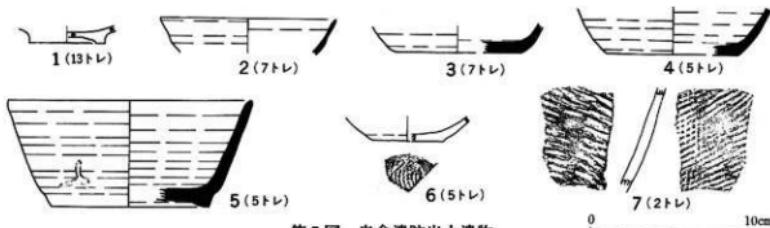
(3) 遺構と遺物 (第7図)

105ヶ所試掘坑を設定したが、遺物が検出された試掘坑は9ヶ所であった。遺構は調査面積の狭さや湧水などの要因から明確には確認できなかった。遺物は、土師器、須恵器が中心で、1~7トレンチ合わせて約50点ほどである。その他には陶磁器1点、鉄滓1点が土師器、須恵器を出土した地点から約200m程離れたところで検出された。

1は、小片のため詳細は不明であるが、中世~近世の陶磁器で皿の高台部と思われる。高台部は露胎し、径は4.8cmを測る。内面には釉薬がかかる。13トレンチ出土で、比較的浅いところから検出されている。2~5は須恵器杯で、無台杯(2~4)、有台杯(5)に分類される。2は無台杯の口縁部片で、口径11.0cmを測り、非常に器壁が薄く、胎土精良である。3、4は無台杯の底部片で、3が底径8.9cm、4が底径8.2cmを測る。同様な器形を呈するものと考えられるが、4は3に比べ体部の立ち上がりが急である。ともに底部は箇切りである。暗灰色を呈し、白色小粒子を多く含んでいる。3が7、4が5トレンチ出土である。5は有台杯で遺存率約1/2であることから器形が明らかである。口径15.2cm、底径9.9cm、器高6.6cmを測る比較的大型の有台杯である。底・体部とともに直線的にまっすぐ開き、僅かの高台部が付く。体部内外面はロクロナデが顕著で、底部は箇切りである。胎土精良で、外面は灰色を呈するが、内面は焼成不良のためか、やや赤褐色がかる。また、本資料の特筆すべき点



第6図 鬼倉遺跡土層柱状図



第7図 鬼倉遺跡出土遺物

は、体部下半外面に墨痕が認められることである。墨痕が薄く判読が困難であるが、「人カ」と読める可能性がある（新潟大学小林昌二氏ご教示）。いずれにしろ、加茂市にとって初めての墨書き土器である。5トレンチ出土である。6は土師器底の底部片であろう。底径4.5cmを測り、底部に回転糸切り痕を有する。明橙色を呈する。5トレンチ出土である。7は土師器底の体部片である。内外面に叩き目が見られる。外面に炭化物が付着している。2トレンチ出土である。

以上、僅少な資料から正確な時期は求められないが、土師器、須恵器は須恵器有台杯の特徴などから9世紀中～後半頃の所産と考えられる。

(4) 調査のまとめ

今回の調査は、広大な鬼倉遺跡推定範囲のほんの一部分を対象にしたものであり、遺跡の内容や性格を明確にすることは、本発掘調査の結果を得たねばならない。しかしながら、出土した遺物からは、平安時代でおおむね9世紀後半頃に1～7トレンチ周辺域が生活の場として利用されていたことが窺える。出土した遺物の量はそれほど多くはないが、加茂市内初の墨書き土器を含むことや初めて沖積地内に立地する古代期の遺跡が調査された意義は少なからずあるものと考えられる。今後は遺物の出土を見た1～7トレンチ周辺部、約2,000m²について本発掘調査を実施し、遺跡の内容や性格を明確にする必要がある。

4. 馬越遺跡第1次調査

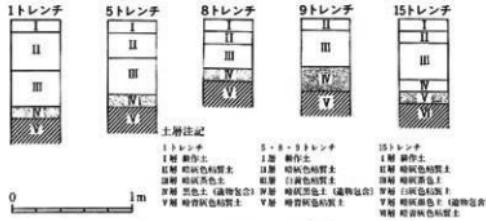
(1) 発掘調査の概要（第5図）

馬越遺跡は下条川左岸にあり、三条市境にかけて位置する。調査は、用地買収が終了している道路工事予定法線内に任意の2m×2mの試掘坑を0.3m²のバックホールにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。遺跡推定地内および周辺部あわせ、約19,000m²を対象に71トレンチ、約280m²を調査した。なお、6月17日に県文化行政課主任北村亮氏から調査方法などについて現地指導を賜った。また、用地買収未了区域が多くあり、来年度以降に残りの区域を調査する予定である。

(2) 層序（第8図）

延長約450mを対象にした調査であり、地点により異なる土層堆積状況が看取された。下条川寄りの地点ではガツボ層と灰色粘質土の堆積が顕著に認められるが、遺物を出土する区域においてはガツボ層は明確ではない。

遺物を出土したトレンチの土層柱状図を示す。1・5・8・9・15トレンチとも地表下



第8図 馬越遺跡土層柱状図

約50～90cmのIV・V層とした黒色系の土層が遺物包含層を形成する。地山は暗青灰色粘質土である。

(3) 遺構と遺物（第9図）

71ヶ所の試掘坑を設定し、15ヶ所から遺物が検出された。九潟遺跡・鬼倉遺跡に比べ、広範囲に遺跡が展開することを示している。遺構は調査面積の狭さや湧水などの要因から明確には確認できなかったが、14トレンチ土層断面に土坑状の落ち込みを確認している。遺物は各トレンチ合わせて土師器60点、須恵器5点で、土師器が多い。

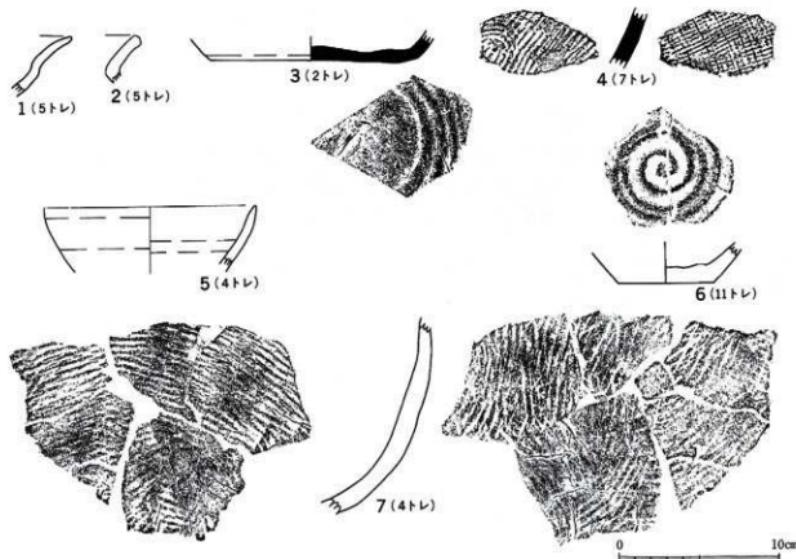
1は土師器杯ないしは高杯の口縁部片で、屈曲して外反する。内面は黒色処理される。焼成は良好で、褐色を呈する。2は土師器底の口縁部片で、外反し端部は丸くおさまる。砂粒を多く含む。1、2ともに5トレンチ出

土である。3は須恵器の無台杯ないし皿の底部片である。底径12.0cmを測り、底面窓切りである。焼成は不良で灰白色を呈する。2トレンチ出土である。4は須恵器の壺体部片である。外面に格子文、内面に同心円文と平行線文の叩き目が施される。灰色を呈し、白色小粒子を多く含む。7トレンチ出土である。5は土師器碗の口縁部片で、口径13.2cmを測る。赤橙色を呈する。4トレンチ出土である。6は土師器底部片で、平底で底径5.8cm、底厚1cmを測る資料である。内面にロクロ調整痕を残す。調整や厚みなどから壺の底部と思われる。11トレンチ出土である。7は土師器長壺の体部下半の資料である。内外面ともに平行線文の叩き目が施され、一部分に炭化物が付着する。4トレンチ出土である。

以上の資料の年代は、1が古墳時代後期の所産であるほかは、須恵器無台杯や土師器壺の特徴などからおおむね平安時代の9世紀～10世紀頃に位置づけられよう。

(4) 調査のまとめ

今回の調査により、馬越遺跡は一部古墳時代後期の土器が出土地したが、中心は平安時代にあることが明らかとなった。比較的大型の土器片を出土することや遺構の存在から集落跡である可能性が高い。本遺跡周辺には5世紀後半頃の土器を出土している新田川遺跡、綠釉陶器を出土している吉津川遺跡（いずれも三条市）があり、それらとの関連や展開に注目したい。遺跡はかなりの広範囲に存在するものと思われるが、本発掘調査が必要な区域は来年度以降に実施する第2次の確認調査結果を待って決定したい。



第9図 馬越遺跡出土遺物

III 県営中山間地域農村活性化総合整備事業関連

1. 調査に至る経緯

県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、平成6年度から三条農地事務所、加茂市農林課と協議を開始し、事業計画にあわせ昨年度から当該事業に係る確認調査を実施したところである（伊藤1996）。今年度の調査は当該事業に係る第2次確認調査となる。

蚊口太遺跡、寺屋敷跡とともに昭和60～61年に実施された詳細分布調査によって発見、周知された遺跡であり、事業計画段階から確認調査の必要性は了解済みであった。当初、市教委では稲刈後の10～11月の間に確認調査実施の方向で検討していたが、様々な事由から農地部局との協議が進まず、なかなか調査日程が決まらなかった。ようやく、三条農地事務所は、平成8年10月31日付け三農地第1071-1、1071-2号で蚊口太遺跡、寺屋敷跡地内において文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知を文化庁長官宛行い、調査のための諸準備が開始された。市教委はその後、11月下旬に開催された農村基盤整備事業推進協議会の席上で、今後の調査予定などについて説明を行い、各方面から早期の調査終了が要望された。また、12月上旬に調査関係内地内の地権者へ調査方法、期間などについて説明を行い土地所有者の承諾書を得た。この段階で、いわゆる積雪期までの調査完了は不可能であることが予想され、春先の調査を念頭に入れ、蚊口太遺跡を年内に、寺屋敷跡は3月頃の調査時期を設定した。寺屋敷跡の調査は、当初計画より遅れたものの年度末までには終了した。なお、蚊口太遺跡については平成8年12月9日付け民資第183号で、寺屋敷跡については平成9年2月17日付け民資第23号で文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛に行い、調査の準備に入った。

2. 蚊口太遺跡第1次調査

（1）発掘調査の概要（第11図）

蚊口太遺跡は大谷川左岸の段丘上で本地域の中で最も広い平坦面に立地する遺跡のひとつである。現況は、水田・畑地であり、水田部分については $2\text{m} \times 5\text{m}$ の試掘坑を 0.4m^3 のバックホー、畑地については作物を避けながら $2\text{m} \times 2\text{m}$ の試掘坑を人力にて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。また、水田部分



第10図 大谷地区的遺跡 ($S = 1/25,000$)

については、地権者の要望で埋め戻しの際、碎石を入れ、点圧して行った。段丘上の調査ではあったが、特に水田部において湧水し、一部水中ポンプも使用した。

調査は12月10日から開始し、降雪を見た12月21日に撤収したが、予想より遺跡の規模が拡大することや予算、天候などを考慮し、来年度あらためて第2次の調査を実施し、遺跡の範囲を把握することにした。

(2) 層序 (第12図)

段丘地形に立地していることや、後世の耕地整理のためか地表面までは概して浅い。特に、畑地の平坦部分に至っては耕作土10~30cmの堆積で明確な遺物包含層は存在しない。水田部分においては、現況においてかなり、削平や切り盛りされた状況が窺え、田面のレベルが一定していない。そのため、かなり畑地とは異なる土層堆積状況であった。また、段丘縁際の緩斜面部の試掘坑(21、38トレンチなど)では土層堆積が厚く、地表面まで調査できなかった。しかし、かなりの土器を含むことから約1m程の遺物包含層が存在するものと思われる。

(3) 遺構と遺物 (第13~15図)

遺構、遺物ともにおおむね段丘の縁際で畑地部分から検出されている。検出された遺構はピット、土坑と斜面部にある捨て場状の遺構がある。図示した30トレンチ検出のピットは径約40~60cm、確認面からの深さ20~40cmである。遺物は出土していない。

さらに、5・18・27・29・31・33

トレンチにてほぼ同規模のピット、土坑が数基検出されている。また、遺物を多量に出土した、14・21・38トレンチ周辺は地形や遺物出土状況などから捨て場遺構であった可能性が高い。これらの遺構は出土遺物から縄文時代中期~後期の所産と考えられる。

これとは対照的に台地中央部付近では遺構は確認できていない。

また、17トレンチにて2基の土壙墓と思われる遺構を確認した。うち一基は、長径約100cm、短径約60cmの土坑のやや南寄りに60×30cmの板で組んだ木棺が据えられていた。この木棺の主軸はほぼ南北方向を指向し、その中央部位に漆椀が一個体副葬されている。その規模から幼児埋葬用とも考えられるが、確認はない。また、伴出遺物がほとんどないため、時期を特定できない。ただ、一点であるが近世以降と思われる陶磁器が検出



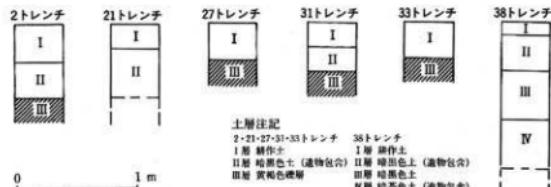
第11図 蚊口太遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1/2,000)

されていることから、近世以降の所産と把握しておきたい。

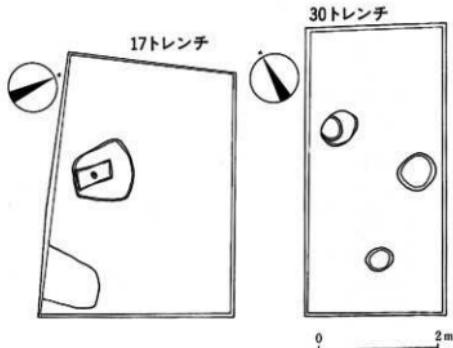
出土した主な遺物は縄文土器で約1,300点程である。石器類もフレークを中心とし、若干検出されている。

1は比較的大型の把手を有する深鉢形土器で口縁～胴上部の資料である。把手部はゆるいくの字状に屈曲して外反し、沈線によって、渦巻文が施される。非常に分厚いつくりである。胴上部には隆沈線によって渦巻文が描かれ隆沈線によって繋がる。隆沈線によって区切られた部分は、やや節の細かいRL縄文が充填される。焼成はやや甘く、黄褐色を呈する。胎土に砂粒が多く含む。21トレンチ出土で、内面を上に向けた状態で検出された。2～5は、深鉢形土器の波状を呈する口縁部片である。いずれも隆沈線によって、渦巻文が描かれる。2、3が21トレンチ、4、5が14トレンチ出土である。6は渦巻文が不明瞭であるが、4に類似したものであろう。口唇端部が肥厚する。14トレンチ出土である。7は波状を呈する深鉢形土器口縁部片で、沈線によって渦巻文が描かれ渦巻文を沈線で繋ぐ。また、胴上部にも節の細かいLR縄文地に渦巻文が描かれる。内面は平滑に磨かれている。なお、内面に炭化物が付着する。21トレンチ出土である。8も波状を呈する深鉢形土器口縁部片で、渦巻文が描かれ、口縁に沿って二列の梢円形の刺突が施される。さらに、頸部に一条の隆帯を巡らせ、やはり刺突文が施される。内面は丁寧に磨かれている。14トレンチ出土である。9は口径33.8cm、現在高23.1cmを測る比較的大型の深鉢形土器である。ゆるやかに膨らむ胴部から、外反する頸部に直立した平縁の口縁部が付く。口縁部文様には二条の刻目隆帯が横走し、刻目を持たない隆帯による渦巻文を繋ぐ。頸部には3本の沈線が横走し、胴部はRL縄文を地文とし、縦位に結節回転文が施される。口縁～胴部内面にかけて炭化物が付着している。21トレンチ出土資料である。10は小型の深鉢形土器である。逆ハの字状に開く器形で、口径16.8cm、現在高17.8cmを測る。口縁部に無文帶を作出し、沈線が規則的に縦位に垂下する。それは、LR縄文地に梢円形の区画を作りだし、区画内には縦位に結節回転文も施される。また、沈線文様の先端部に渦巻文も描かれる。内面は丁寧に磨かれる。21トレンチ出土資料である。11、12は浅鉢形土器である。11は口径26.4cmを測る。隆帯によって梢円形の区画や渦巻文を施す。LR縄文を地文とするようである。砂粒を多く含み、焼成は不良である。21トレンチ出土である。

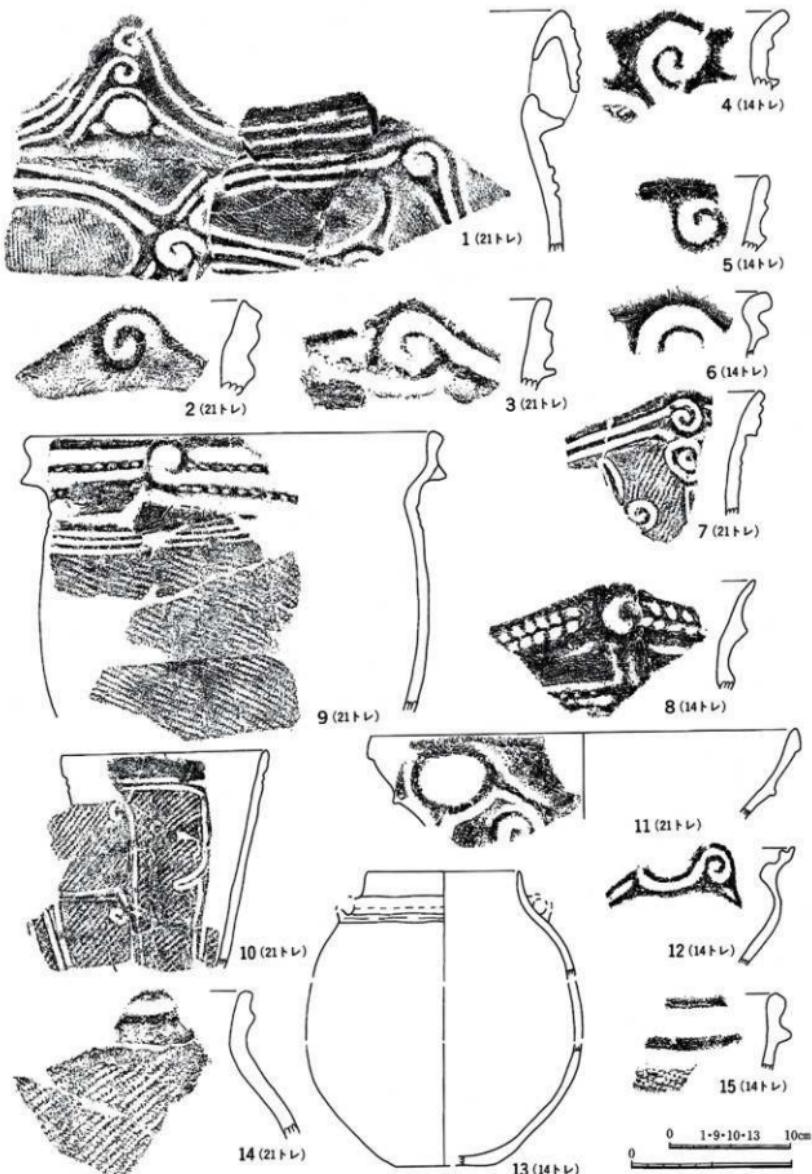
12は突起付きの器形で、突起部内面に沈線で渦巻文を施す。胎土に金雲母を含む。また、内面に炭化物が付着している。14トレンチ出土である。13は胴部中位に最大径を持ち、ゆるく外反する短い口縁部を有する深鉢形土器である。口径12.6cm、底径7.8cm、器高約24cmを測る。剥落のため詳細は不明であるが、頸部に橋状把手を有する。胴部は無文である。孔は穿たれないものの、器形等からいわゆる有孔鋤付土器の一種と思われる。内外面の一部に赤色物質が付着し、自然科学分析により



第12図 蚊口太遺跡土層柱状図

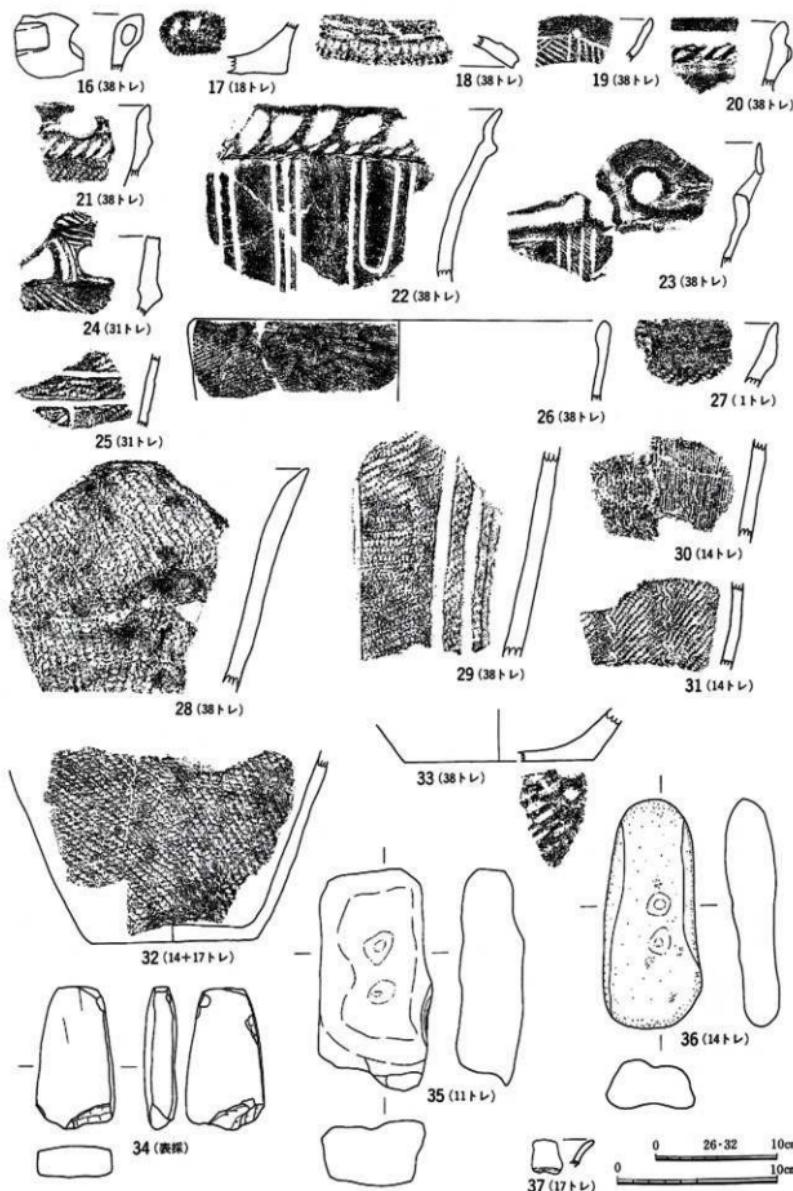


第13図 蚊口太遺跡17・30トレンチ造構配置図



第14図 蚊口太遺跡出土遺物

2. 蚊口太遺跡第1次調査



第15図 蚊口太遺跡出土遺物

ベンガラと判明した(V)。14トレンチ出土である。14、15は短く外反する深鉢形土器口縁部で、口縁に沿って一条の隆帯が巡る。14は地文にLR縄文、15は撚糸文を有する。それぞれ、21・14トレンチ出土である。16は橋状把手を有する深鉢形土器口縁部、17は刺突文を有する底部片、18は縁辺部に刺突文を有する蓋形土器である。16、18は38、17は18トレンチ出土である。19~23は38トレンチ出土資料である。19はやや丸みを帯びる鉢形土器の口縁部片で沈線により文様が描かれる。また、径0.5cmの補修孔が内面から穿たれている。口縁部内面にも一条の沈線が巡る。20は口唇部に一定の幅を持ち、その下部に刻目を持つ隆帯を施す。21、22は口唇部に梢円形の指頭圧痕、その下に刻目を施す資料である。頭部以下に21は縄文を地文に、22は沈線により文様を施す。23は孔を有する波状口縁部で、頭部以下には縦位の沈線を引き、沈線間に縄文を施す。24は孔を有する突起付き口縁部で、突起上端部~頭部に沈線により文様を施す。25は縄文地上に横位の沈線を施し、沈線間に縦方向に弧状の沈線で区切るものである。26~33はいずれも深鉢形土器で時期が不明確な資料である。26は口径33.6cmを測り縄文を地文とする。口端部がやや肥厚する。27は一定幅の無文帶を有し、その下部にLR縄文を施す。28はRL縄文を地文とする。非常に脆く、胎土に金雲母や砂粒を多量に含む。29~31は胴部片で29はLR縄文地に幅太の沈線が縦位に施される。30は条線文、31はLR縄文地に縦位に結節回転文が施される。32、33は底部資料である。32は底径13.0cmを測りRL縄文を地文とする。大部分が14トレンチ出土であるが胴部片の一部が約80m離れた17トレンチから出土し、接合した。33は、底径11.6cmを測り、底部外面に網代痕を有する。石器は34の磨製石斧、35、36の凹石が出土した。37は17トレンチ出土の近世陶磁器である。屈曲する口縁部片で皿と考えられる。内面に二重圓線が見られる。小片のため時期、系統などは不明であるが、17トレンチ検出の土壌墓と関係するものと思われる。

以上の土器の年代については、1~15は隆帯や渦巻文などの特徴から大木8b式新~9a式古に比定でき、縄文中期中葉~後葉に位置づけられる。なお、9の土器は沖の原式(江坂・渡辺ほか1977)との関連が窺える。16~24は三十稻場~南三十稻場式期に比定される縄文後期初頭~前葉の土器である。25は後期中葉の三仏生式と思われる。図示した土器の出土位置を窺うと台地南部に位置する14・21トレンチにて縄文中期中葉~後葉の土器、北西部に位置する38トレンチから縄文後期初頭~前葉の土器が偏在して出土している様相が看取される。26~33の土器の年代もこれらから導き出される可能性が高い。

(4) 調査のまとめ

今回の調査で検出した遺構からは、明確な居住痕跡は確認できなかったが、削平され消滅した可能性も残る。また、遺物は段丘縁際~緩斜面部での出土が顕著であり、該区域が土器捨て場として利用されたことも考えられる。遺物は縄文土器を主体とし、若干の石器がある。これらの遺物や地形利用状況などから蚊口太遺跡は縄文時代中期後半~後期前半にかけての集落跡と判断される。加茂川支流域での縄文期の遺跡調査は初めてでもあり、山間地域の縄文文化を窺う資料となろう。地形から台地東方に向かい遺跡が存在する可能性が高く、来年度以降第2次の確認調査を実施し、遺跡の範囲を明確にする必要がある。

なお、この調査結果を受け、農地部局、県文化行政課と協議し、今後の方針として、削りを伴わない盛土工法で農地にするものであれば、本調査は行わないものとする案で検討されている。

3. 寺屋敷跡

(1) 発掘調査の概要 (第16図)

寺屋敷跡は西向きの山麓部に位置し、真言宗東龍寺があったとされる(加茂市史編纂委員会1975)。丘陵斜面部は旧共同墓地が存在し、墓塔が残っている。今回の調査は、この山麓から農道を挟み眼前にある水田部分を対象

行ったもので、伝承のみで実態が全く不明であった寺屋敷跡の解明が期待された。調査は諸般の事情から雪解けを待ち、年度末に行われた。0.4m²のパックホーで2m×5mの試掘坑を任意に設定し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。また、地権者の要望で埋め戻しは碎石を入れ点圧して行った。約8,000m²を対象とし、約160m³の調査を行った。

(2) 層序 (第17図)

現況においてかなりの段差を持った水田が営まれておらず、かなりの改変が窺えるもので、各トレンチにて異なる堆積状況を呈する。地形的に丘陵間に位置する谷底平野にあたり、疊層を地山とする。一番低い所に位置する7トレンチにおいては130cm程の暗黒色土が堆積している。

(3) 遺構と遺物 (第18図)

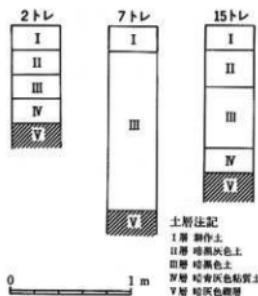
遺構は全く確認できなかった。遺物も極めて少なく、2および8トレンチから近世以降の陶磁器が2点検出されたのみである。1は8トレンチ出土の肥前系磁器である。口径8.5cmを測る小型の丸碗で、外面に二重圓線と篆文(?)が描かれる。概ね18世紀代のものであろう。

(4) 調査のまとめ

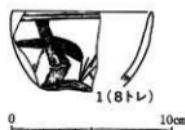
上記の結果から、本調査対象区域内においては寺屋敷跡に間連した遺構、遺物は検出できなかった。近世以降の遺物が若干出土しているが、直接関連する遺物であるかどうかは不明である。いわゆる寺院址が本地点に言い伝えどおりあったとすれば、丘陵斜面部から据部にかけて残存するものと考えられる。今回の調査対象区域内においては、寺屋敷跡およびそれに関連した遺跡は存在しないものと判断される。



第16図 寺屋敷跡確認調査トレンチ設定図 (S=1/2,000)



第17図 寺屋敷跡土層柱状図



第18図 寺屋敷跡出土遺物

IV 民間開発関連

1. 調査に至る経緯

アークランドサカモト（株）は、加茂市役所に隣接する大字加茂地内約11,000m²においてショッピングセンター造成工事を計画し、平成9年3月開店を目指していた。この地区は平成7年度末に県教委による詳細分布調査の結果、当該計画地内において遺物が表採され、馬寄遺跡として周知化されるに及び、工事計画とあわせ早急な対応に迫られた。市教委は、アークランドサカモト（株）および土地地権者と平成8年8月以降協議を重ね、確認調査を実施することで合意し、市教委は調査の諸準備を開始した。この間に、アークランドサカモト（株）は平成8年7月30日付けで文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を、市教委は平成8年10月21日付け民資第133号で文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛に行った。その後、調査の準備に入り、確認調査は、年度末の3月上旬に実施した。

2. 馬寄遺跡

（1）発掘調査の概要（第19図）

調査は、後の耕作への影響を考慮し、極力掘削箇所数を減らすこと、畦上にトレントを設定することを条件に行われた。2m×5mの試掘坑を0.4m³のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。工事予定区域約11,000m²を対象にして約120m²を調査した。調査中かなりの湧水があり、遺構確認は困難を極めた。なお、埋め戻しの際に川砂を入れ、点圧して行った。

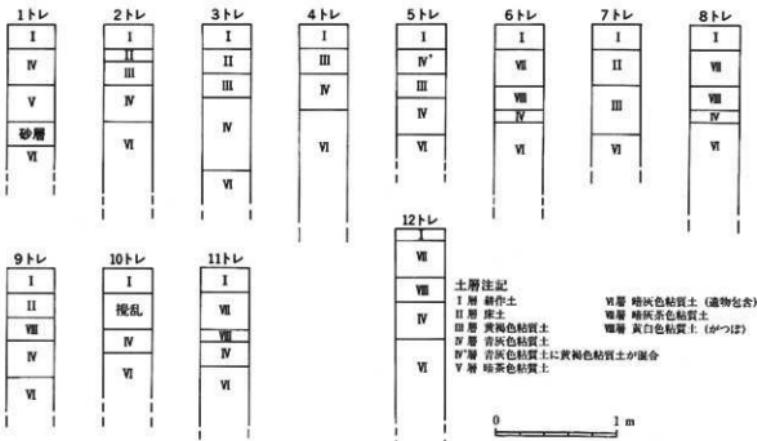
また、本遺跡に近接する釜淵遺跡の発掘調査の成果から、時期の異なる遺物包含層が2層存在し、現地表下約1mのところに古墳前期の遺物包含層があることが明らかであったことから深度に留意しながら掘削を進めた。

（2）層序（第20図）

層序は、I層耕作土、II層床土でそれ以下は粘質土系の土層が堆積する。比較的狭い調査対象区域ではあるが、地点により土層堆積状況が異なる。北東方向に設定した、6・8・11・12トレントにおいては同様な土層堆積を示し、Ⅵ層がつづく層の堆積が認められ、他のトレントと比べ、Ⅶ層暗灰色粘質土が厚く堆積している。12トレントの現地表下140cmの



第19図 馬寄遺跡確認調査トレント設定図 (S = 1 / 4,000)



第20図 馬寄遺跡土層柱状図

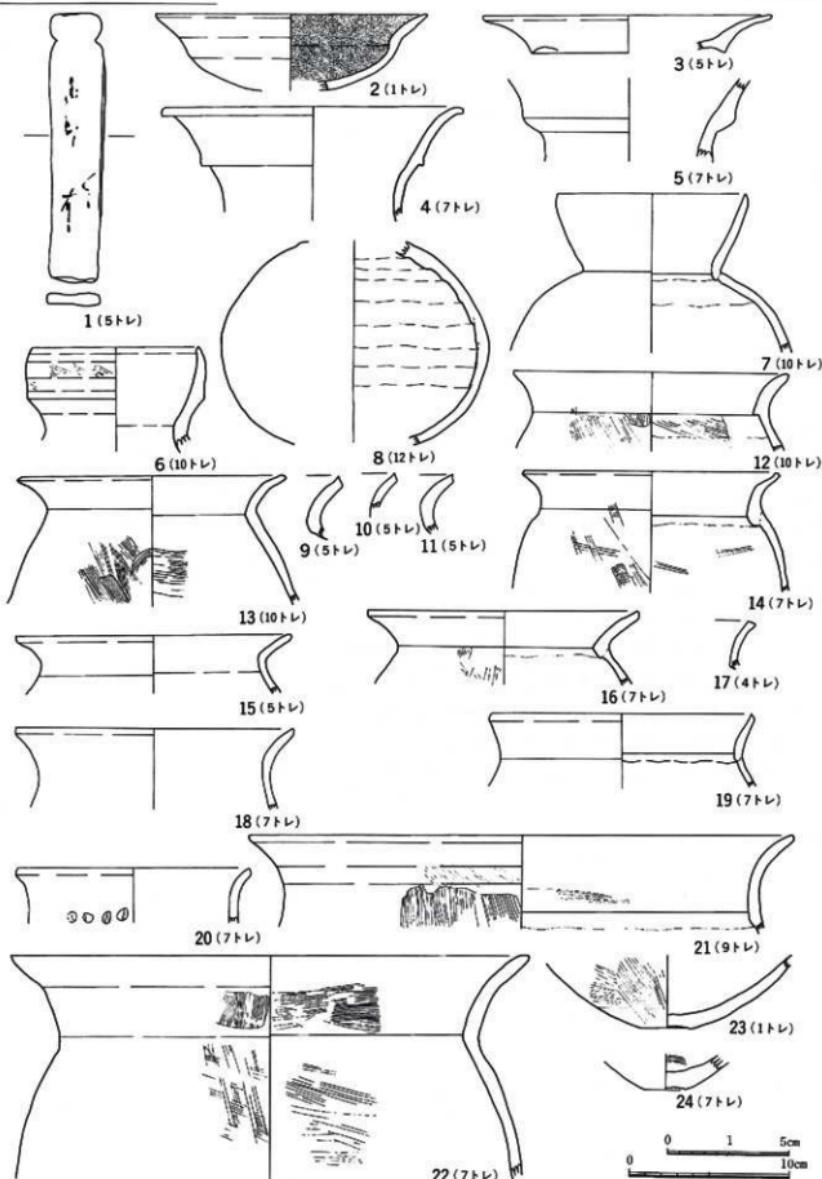
暗灰色粘質土中から古墳前期の壺が一個体出土したが、他トレンチ出土層位よりも深いところからの出土であり、恐らくは北東方向に向かい地盤が低くなるのではないかと思われる。釜窪遺跡に比べ、上層面の遺物包含層の形成は明確ではない。本遺跡の主体時期である古墳前期の包含層は概ね地表下100~140cmの暗灰色粘質土にあるが、層厚ならびに地山面との層界などの確認ができなかった。

(3) 造構と遺物（第21、22図）

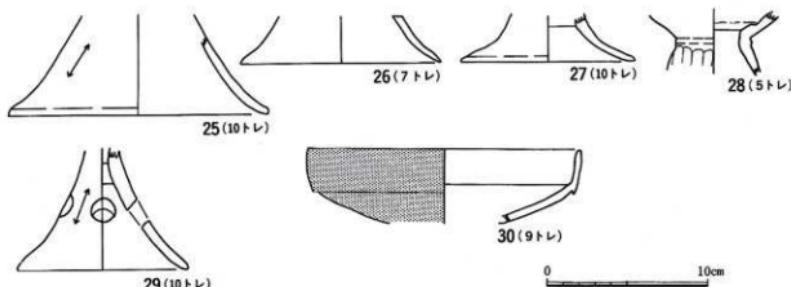
造構は調査面積の狭さや湧水などで明確には確認できなかったが、5・7・9・10トレンチ下層面における土器の出土状況などから土器集積造構が存在した可能性が高い。特に7トレンチにおいては大型の土器片が検出されている。なお、1・2・5・7・8・10トレンチ上層面においては古墳後期～近世の遺物が少量出土している。以下、本遺跡の主体時期である古墳前期の資料を中心に説明をする。

上層面からの出土遺物は少なく、図示できるものは以下の2点のみである。1は5トレンチ上層面出土の木簡である。上端の左右に切り込みを入れた039型式を呈し、下端を欠損する。現在長11cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。片面に墨痕が見られ、新潟大学の小林昌二先生に釈読をお願いし、赤外線テレビカメラを使用し、4ないし5文字の墨痕を確認したが、墨痕が薄く読解できなかった。その形態から付札木簡と考えられるが、伴出遺物もなく時期も特定できないことから詳細は不明である。2は古墳後期土師器杯である。口径16.8cmを測り、内面黒色処理が施される。1トレンチ出土である。

下層面出土の土器はいわゆる「古式土師器」すべて古墳前期のものである。器種として、壺形土器を中心とする壺形土器・高杯形土器・器台形土器・その他不明がある。3~8は壺形土器である。3~5はいずれも有段口縁であるが、段が比較的明瞭な3、段があまり明瞭でない4・5、内湾気味に立ち上がる6に細分される。口径は3が18.0cm、4が18.2cm、6が10.4cmを測る。7は球形を呈した体部から内湾気味に開くやや長めの口縁部を有するいわゆる小型壺である。口径は11.6cmを測る。器壁がやや薄く、外面は丁寧に磨かれている。頸部～体部上半に輪積痕跡を残す。8はややひしゃげた体部の壺形土器で、口縁および底部を欠損する。体部上位～中位にか



第21図 馬寄遺跡出土遺物



第22図 馬寄遺跡出土遺物

けて明瞭な輪積痕跡が見られる。

9～24は壺形土器で、一番出土量が多い器種である。全体の器形が分かることはない。口径約16～17cm前後の中型品を中心であるが、21、22のように口径30cm以上の大型品もある。口縁部の形態はすべて「く」の字状に外反する。屈曲の明瞭なA類(9～16)、屈曲のゆるやかなB類(17～22)がある。A類のうち口縁端部が面をもつもの(9～11)、丸くおさまるもの(12、13、15)、上につまみあげられるもの(14、16)に分類される。B類も口縁端部が面をもつもの(17)、丸くおさまるもの(18、21、22)、上につまみあげられるもの(19、20)に分類される。内外面ともハケ調整されるものが多い。また、20の頸部近くに棒状工具による刺突が見られる。

23、24は上げ底を呈する底部片で、それぞれ底径3.0cm、2.4cmを測る。

25～27は高杯の脚部である。杯部の形態は不明であるが、脚部は「八」の字状に広がる器形である。25は比較的大型で、脚部底径16.2cmを測る。外面はよく磨かれる。

28、29は器台である。28は小型の器台で、受部、脚部とともに欠損し器形は不明である。29は「ハ」の字状に広がる脚部で、脚部中位付近に透かし孔を持つ。外面はよく磨かれる。

30は類例を探しえない器形を呈する。ほぼ直立した口縁部で口径17.0cmを測る。外面は赤彩される。小型鉢形土器の一種であろうか。ご教示願いたい。

以上の古式土師器の位置づけであるが、いわゆる一括性に乏しい資料であることや小片が多いことなどから明確にし得ない。しかし、北陸北東部系の壺の占める割合が高いことや壺の有段口縁の形態、小型壺(7)、小型器台(28)、大型の壺(21・22)の存在などを指標とし、近年の成果に照らし合わせるとおおむね「新潟シンポジウム編年」(川村1993)5～7期に比定されよう。先に触れた釜淵遺跡出土土器(未発表)も該期に位置づけられるものが多く、同一の遺跡として展開している可能性が高い。

(4) 調査のまとめ

上記の結果から、本遺跡は上層面においては古墳時代後期～近世、下層面では古墳時代前期の遺物を包含することが明らかになった。伴出遺物がないため時期を特定できないが上層面からは木簡も出土した。形態から荷札と考えられるが、文字が判読できないため不明である。下層面においては土器出土状況などから何らかの遺構が存在した可能性が高く、恐らく釜淵遺跡と同一の遺跡となる可能性が高い。扇状地端部に位置し、古墳前期の土器を濃密に包含する遺跡であることから、加茂市域平野部の開発史などを考える上でも重要な遺跡である。

V 自然科学分析

蚊口太遺跡赤色物質の由来について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的および試料

蚊口太遺跡で検出された縄文時代中期後半の深鉢形土器の内・外面に付着していた赤色物質の由来を明らかにするために、この赤色物質を採取し、X線回折分析による成分分析を実施した。

2. 分析方法

土器表面より赤色物質を採取し、105℃で2時間乾燥させ、メノウ乳鉢で微粉碎した。この微粉碎試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折測定用試料（無定位試料）を作成した。作成したX線回折測定用試料を、以下の条件で測定した（足立、1980；日本粘土学会、1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

装置：島津製作所製 XD-3 A	Time Constant: 1.0 sec
Target: Cu (Kα)	Scanning Speed: 2°/min
Filter: Ni	Chart Speed: 2cm/min
Voltage: 30KVP	Divergency: 1°
Current: 30mA	Receiving Slit: 0.3mm
Count Full Scale: 5,000c/s	Scanning Range: 5~45°

3. 結果および考察

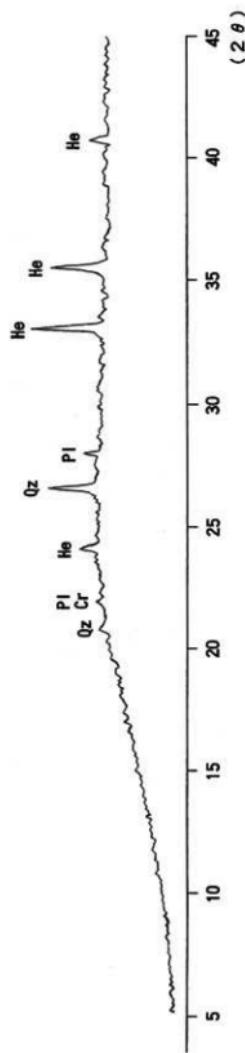
結果を第23図に示す。この赤色物質は約20°(2θ)付近からベースが高くなっていることから、酸化鉄を含む。ピークとして検出された鉱物は、赤鉄鉱(hematite)、石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、クリストバライト(cristobalite)の4種類である。この内、赤色を呈する鉱物は赤鉄鉱(hematite)が代表的である。したがって、赤色物質の素材はベンガラと判断される。

なお、他の鉱物は岩石や土壤にごく一般的に認められる鉱物であることから、埋没中に混入した周辺土壤や、赤色物質採取時に混入した土器胎土に由来すると推定される。

引用文献

- 足立吟也 (1980)「6章 粉末X線回折法 機器分析のてびき3」, P. 64-76, 化学同人。
日本粘土学会編 (1987)「粘土ハンドブック 第二版」, 1289P., 技報堂出版。

検出試物略号
Qz : 石英 (quartz)
Pl : 斜長石 (plagioclase)
Cr : クリスチナイト (cristobalite)
He : 赤鉄鉱 (hematite)



第23図 蛇口大遺跡赤色物質のX線回折図

VI まとめ

1. 平野部における遺跡調査から

今回報告した遺跡の内、丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡・馬寄遺跡はいずれも現在の表層地形区分では扇状地端部～沖積低地に立地する。ごく最近まで、これらの遺跡の存在は知られず、隣接する三条市や田上町に比べ、いわゆる平野部の遺跡分布状況に大きな開きが存在していた。しかし、この度の確認調査により加茂市域の平野部の遺跡について少なからず知見をもたらすことができた。それは、当該区域の開発史や土地利用の変遷などを考える際、極めて重要なことである。確認調査段階で論じるには無理があるが、後の本調査ないしは周辺部での調査の検討課題を提示するため、あえて現時点で取扱できる事実を中心に述べてみたい。

まず、加茂市域平野部の現時点で確認できる一番古い時期の遺物としては、丘陵縁辺部の低地から縄文中・後期の土器が出土・採集されている加茂市役所遺跡、陣ヶ峰北遺跡、花立遺跡などを除き、丸潟遺跡・馬寄遺跡下層出土の古式土師器があり、古墳時代前期に比定できる。丸潟遺跡と馬寄遺跡は約500mの距離を置いて存在するが、表層地形区分で扇状地端部に位置する馬寄遺跡のほうが遺物・構造ともに濃い状況が窺える。とともに、現地表下約1mの層位から古式土師器が出土するが、丸潟遺跡においては包含層より上位にガツボ層の形成が認められる。その後は馬寄遺跡上層において若干あるが古墳時代後期の土器が出土し、本遺跡南東約200mにある釜淵遺跡と同様な状況が認められる。つまり、古墳時代前期と古墳時代後期の生活面の間には約1m程の粘質土が堆積し、概ね古墳時代中期において何らかの要因により生活地点を移動したことが予想される。丸潟遺跡ではこのような状況は見られないが、釜淵遺跡・馬寄遺跡周辺部における特殊な状況であるのか今後の調査によって検証する必要がある。これは越後全域において古墳時代中期の動向が不明確なこととあわせ、重要なテーマに成りうるものであろう。また、馬寄遺跡や釜淵遺跡出土の古式土師器は「新潟シンポジウム編年」5～7期に位置づけられ、該期は古墳時代集落消長の最も大きな画期で、新集落誕生の時期とされる(滝沢1995)ことから、馬寄遺跡などは無住の地に新たに誕生した集落のひとつと位置づけることも可能になろう。ちなみに、近隣で確認されている該期の遺跡として三条市狐崎遺跡(金子1981)、栄町乙号A遺跡(大橋1994)があげられ、後者は馬寄遺跡などと同じ沖積地に立地することは注目される。

なお、加茂市においては、これらの調査に先立ち、昭和48年に加茂川右岸の丘陵と加茂川にはさまれた沖積地にある千刈遺跡が、千刈川改修工事により発見、緊急調査され、千刈川河床の地表下約3.5mの青色粘土層から古墳後期の土師器が多量に出土していることを忘れてはならないであろう。報告書では丘陵縁辺部および水田面下からの弥生～古墳期の遺物の出土に注意を向ける必要があることをすでに指摘されている(中島・駒形・八百枝1973)。河下ということもあり、上記の遺跡立地とは同列には扱えないかも知れないが、予想を上回る深さに古墳期以前の遺跡が存在する可能性を示唆する。そして、丘陵縁辺部からやや離れた水田面下に古墳期の遺跡が展開することは確實になったと言える。

また、鬼倉遺跡・馬越遺跡の調査からは概ね9世紀後半～10世紀前半ころの人達が沖積低地へ盛んに生活の舞台を求めたことが窺え、周辺の遺跡分布状況もそれを補強する。具体的な遺跡の性格は本調査の結果を待たねばならないが、鬼倉遺跡からは「人カ」と読める墨書き土器が出土したことは注目される。現在、平野部で表面採集される遺物は古代の土師器・須恵器がほとんどであり、鬼倉遺跡・馬越遺跡しかり古代期に入って、開発の画期があったものと想像される。それらの遺物の詳細な時期を追求し、地域の遺跡の変遷、動態を調べることが今後の大きな課題であろう。

以上から、あくまで現段階での推測に過ぎないが、加茂市域のいわゆる沖積低地部では、古墳前期、後期と平安期に積極的な土地利用が窺え、ところにより同一地点において複数の遺構・遺物検出面が存在する。今後とも沖積低地部での調査においては、より深い層位での遺跡確認に注意しながら進める必要性を感じる。

2. 大谷地区における遺跡の分布について（第10図）

大谷地区は加茂川支流の大谷川が段丘地形を形成するが、段丘上も水田等が営まれ、七谷において最も可耕地に恵まれた収穫率の高い地域である。恐らく耕作時に土器等が出土することは度々あり、地元では遺跡の存在は比較的古くから留意されたところであったと思われる。大谷地区における考古学的調査は、国営加茂東部地区総合農地開発事業に伴い昭和60～61年度にかけて実施された詳細分布調査が最初である。この調査は大谷地区のみならず七谷ほか全城の遺跡分布の実態を浮き彫りにした重要な調査である。ちなみに大谷地区では原始3・古代中世3・城館跡4・塚類2遺跡と17箇所で中世～近世石造物類が確認・発見された(川上ほか1987)。その後、上記開発は実施されず発掘調査された遺跡はなかったが、今回の県営圃場整備事業に伴い再度の分布調査と確認調査が行われ、ある程度の遺跡の分布について把握することが可能になってきている。ここでは、これらの成果を踏まえ、極めて小地域内での遺跡の分布ではあるが概観してみたい。

本地域内において縄文時代以前の遺跡は未確認である。加茂市内における旧石器時代の遺跡は本地域を含む七谷地区において3遺跡確認されているが、いずれも加茂川沿いの河岸段丘に立地し、加茂川支流域沿いでは確認されていない。縄文時代の遺跡は大谷川左岸に形成された段丘上に上流域から初田遺跡(3)・丸山遺跡(4)・田中屋敷遺跡(5)・蚊口太遺跡(6)・草生津遺跡(9)・伝湧泉寺遺跡(10)・古見道遺跡(13)の7遺跡が把握されている。しかし、蚊口太遺跡を除きいずれもフレークや土器の小片が採集されているのみで、詳細な時期比定は困難である。今回の蚊口太遺跡の確認調査の成果から縄文中期～後期にかけての活動痕跡は明瞭であるが、それ以前の時期は不明である。また、蚊口太遺跡を除いた遺跡は比較的平坦地の狭いところに立地していることから、いずれも小規模な遺跡の存在が予想される。その後の弥生時代～古代にかけての遺跡は全く確認されていない。この状況は七谷全城でも同様である。恐らく、生業形態の変化や政治的原因により、無入化を引き起こしたものと想像される。いまのところ、継続した生活の営みは確認できず、今後の大きな検討課題となろう。そして、中世期以降再び生活の舞台となる。

中世期の遺跡は、いずれも珠洲焼などの陶磁器類の採集遺物はあるものの明確に時期比定できるものではなく、詳細な時期は不明である。今回の確認調査では中世の遺物は検出できなかつたが寺屋敷跡(2)・陶磁器類が採集された日渡遺跡(8)・珠洲焼片が採集され周辺の地名も注意されるたて屋敷遺跡(11)がある。また、鐵滓が出土し、立地条件などから製鉄遺跡と推測される石五郎屋敷遺跡(1)・岩野遺跡(12)も周辺の状況から中世期の所産の可能性がある。また、城館は下大谷地区に集中し、いずれもそれほど堅牢な遺構は構築していないが、石高山城跡(19)・石山城跡(17)・出戸星橋(18)・木戸口星橋(16)が確認されている。これらは加茂川沿いの丘陵頂部に立地し、大谷に入るルートを守るようでもある。石造物については宝鏡印塔の残欠ではあるが、3地点で6個体が確認され、中世後期のものと考えられる。元位置は不明であるが、岩野地内(15)・宮の下地内(14)・蚊口太地内(7)にある。このように、種々の遺跡、遺物から中世後半期頃大きな変革があり、再び生活痕跡を残すようになる。近世に至り、現在に通じる生活環境が整備され、今まで続くものであろう。

今後は、各遺跡の詳細な時期を把握し、より細かな遺跡の動態や変遷に迫る必要があるが、概ね縄文中期頃には人々が生活し始め、弥生～古代期の空白期間を置き、中世後期頃に再び多種類の遺跡が形成され、現在に至るという状況は指摘できよう。

凡	例	
法量	口=口径 底=底径 高=器高	
胎土	石=石英 長=長石	
地	成形	測量
不	火	火又火
電	内火ハニ	火又火
器	内火ハニ・火又火・脚火 ケツリ・ハニ・壁内火脚火	内火孔
胎	火	内火又火

古漢遺跡

中會清跡

品種	出	生	土	供	用	根	茎	葉	花	果	種	等
名	地	性	質	能	量	形	色	質	形	色	量	等
3-1.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	4.5	白色	白	厚	筒状	淡紅	1.5	良
3-2.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	11.0	白色	白	厚	筒状	淡紅	2.0	良
3-3.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	5.2	白色	白	厚	筒状	淡紅	1.8	良
3-4.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	5.2	白色	白	厚	筒状	淡紅	1.8	良
3-5.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	11.0	白色	白	厚	筒状	淡紅	2.0	良
3-6.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	4.5	白色	白	厚	筒状	淡紅	1.5	良
4-1.トントン	高知県	高	高含水	吸水能	4.5	石・細網	明綠	薄	筒狀	淡紅	1.5	良

馬說遺跡

數口大遺跡

石佛
卷之三

2.4	西	断面石墨	(8.8)	4.8	2.0	147.5	成岩	定角式、刃状欠締
2.5	1.3	トレンチ	断面	15.6	7.1	8.9	499.5	初成岩
2.6	1.4	トレンチ	断面	14.1	6.1	3.5	375.5	安山岩

寺歷敷跡

番号	出土位置	測量部位	地盤(cm)	土色	調査成	形・質	備考
1	トレンチ周縁部	斜面	口-伴部	口6.5		二重塗施、柱物文	

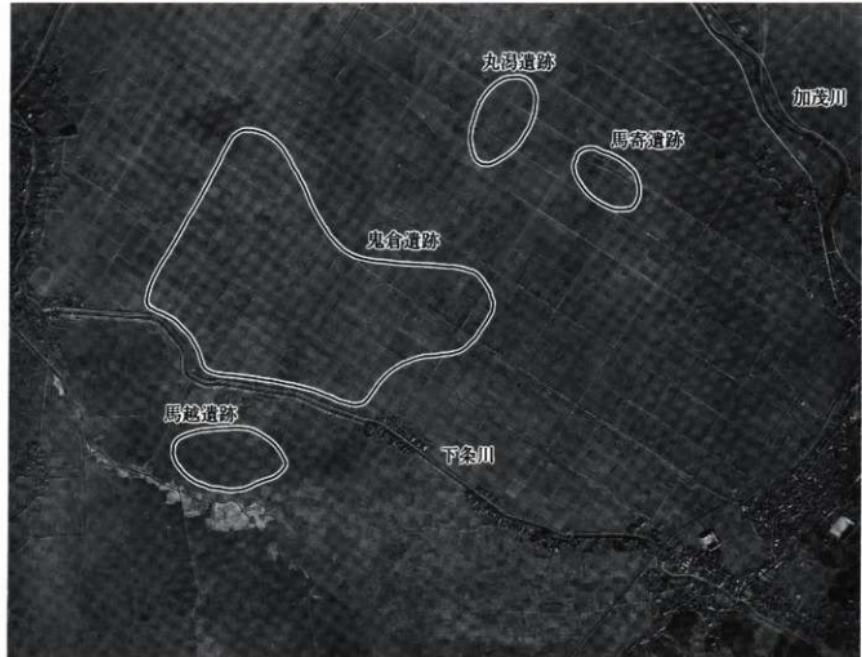
馬奇道
卷一

第2章 调物观察表

【引用・参考文献】

- 安藤正美 1996 「見附市内遺跡範囲確認調査報告書」 見附市教育委員会
- 伊藤秀和 1995 「加茂市役所遺跡」 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1996 「平成7年度加茂市内遺跡確認調査報告書一屋敷田遺跡 上大谷地内 草生津遺跡」 加茂市教育委員会
- 江坂輝弥・渡辺誠ほか 1977 「沖ノ原遺跡発掘調査報告書」 津南町教育委員会
- 大橋信彦 1994 「乙号A遺跡」 栄町教育委員会
- 岡本部栄 1994 「野崎遺跡発掘調査報告書」 西山町教育委員会
- 金子拓男 1981 「狐崎遺跡」 『三条市史』資料編第一巻 考古・文化 三条市史編修委員会考古部会
- 金子拓男・寺崎裕助ほか 1982 「羽黒遺跡」 見附市教育委員会
- 加茂市史編纂委員会 1975 「加茂市史」下巻 加茂市
- 川上貞雄ほか 1987 「東部地区遺跡詳細分布調査報告書」 加茂市教育委員会
- 川村三千男・富樫秀之ほか 1993 「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 前田遺跡」 朝日村教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」 『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相—越後・会津・能登—」 『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』 同研究者グループ
- 佐藤雅一・石坂圭介 1993 「多賀屋敷遺跡—第二次発掘調査報告書—」 越路町教育委員会
- 品田高志 1991 「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ—前期土器編年の現状と編年試案—」 『柏崎市立博物館』 館報No.6 柏崎市立博物館
- 品田高志・中野純・斎藤幸恵 1995 「柏崎市の遺跡Ⅳ—柏崎市内遺跡第Ⅳ期発掘調査報告書—」 柏崎市教育委員会
- 滝沢規朗 1995 「古墳出現前後における集落の動向—越後の集落を考える上での基礎整理として—」 「研究紀要」 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1989 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」 『新潟考古学談話会会報』 第3号
- 寺村光晴・藤田亮策 1961 「柄倉」 柄尾市教育委員会
- 富樫雅彦・佐藤雅一 1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について(上)」 『三条考古学研究会機関誌』第3号
- 中島栄一・駒形敏朗・八百枝茂 1973 「千刈遺跡調査略報」 加茂市教育委員会
- 中島栄一 1981 「その他の主要遺跡」 『三条市史』資料編第一巻 考古・文化 三条市史編修委員会考古部会
- 藤巻正信ほか 1991 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 城之腰遺跡」 新潟県教育委員会

写 真 図 版



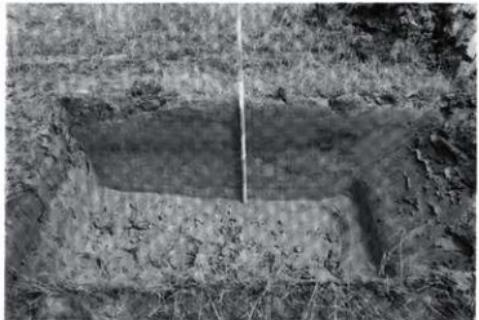
丸窓遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡・馬寄遺跡周辺の空中写真



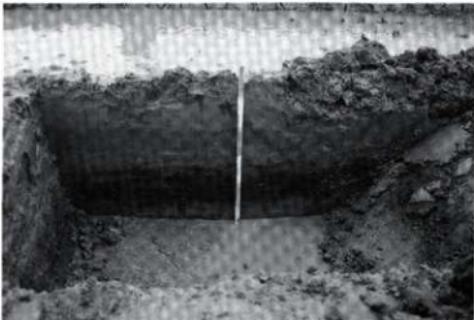
丸窓遺跡遠景 南から



調査風景

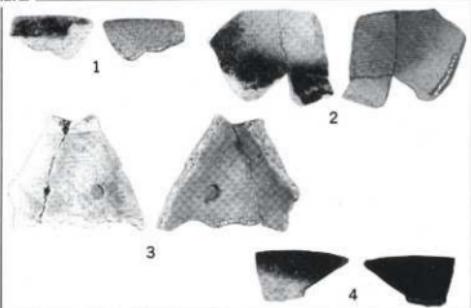


2トレンチ土層断面 西から



7トレンチ土層断面 西から

図版2



丸窓遺跡出土遺物



鬼倉遺跡近景 東から



調査風景



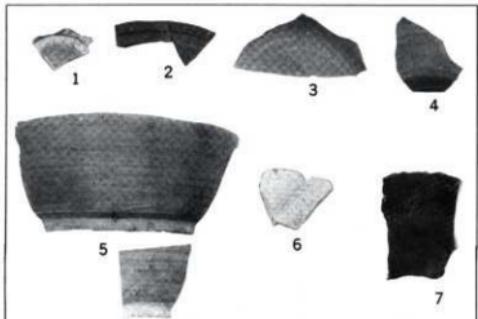
2トレンチ土層断面 東から



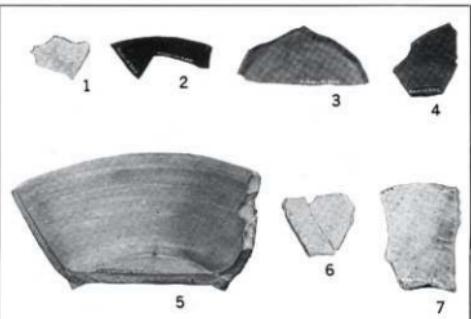
5トレンチ土層断面 西から



7トレンチ土層断面 南から



鬼倉遺跡出土遺物（外）



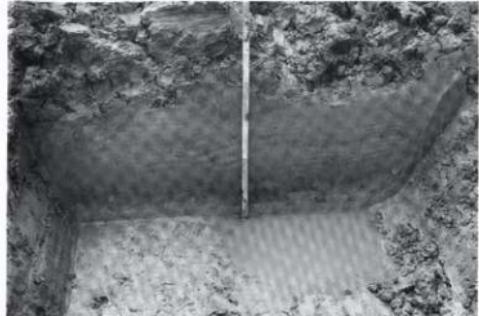
鬼倉遺跡出土遺物（内）



馬越遺跡近景 東から



調査風景



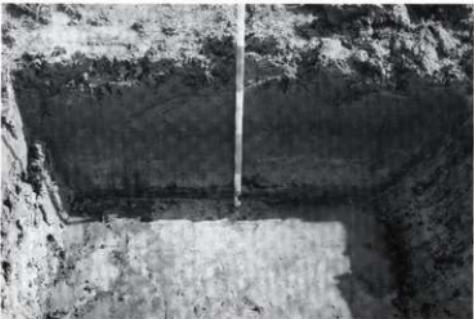
1トレンチ土層断面 東から



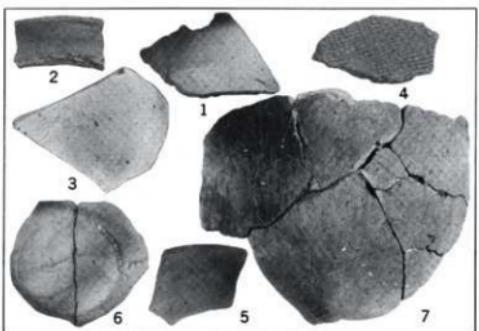
9トレンチ土層断面 東から



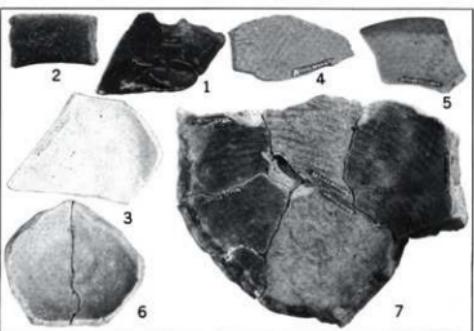
9トレンチ土層断面 北から



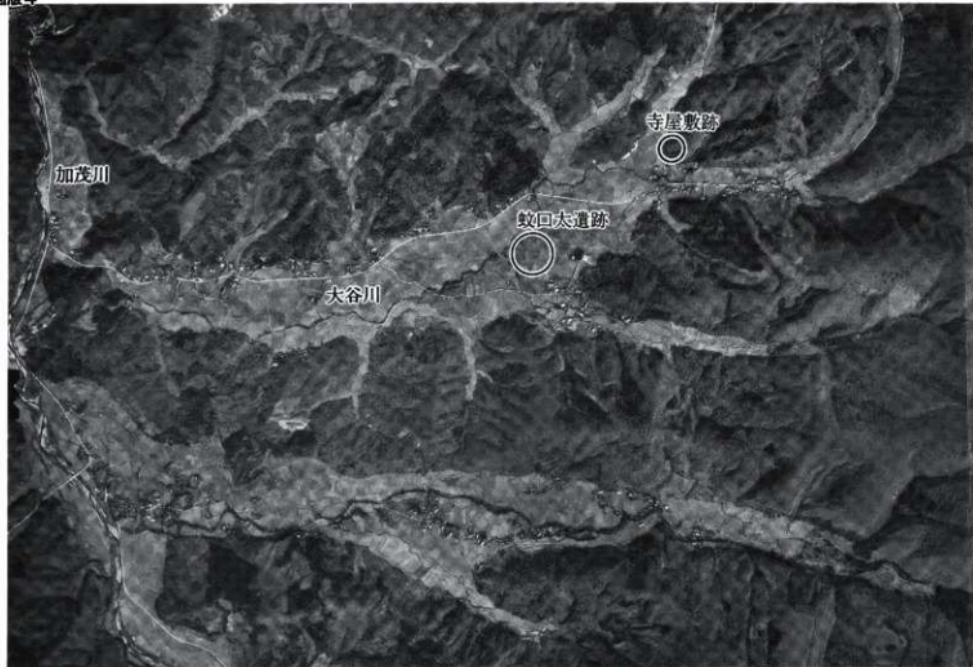
15トレンチ土層断面 西から



馬越遺跡出土遺物（外）



馬越遺跡出土遺物（内）



蚊口太遺跡・寺屋敷跡周辺の空中写真



蚊口太遺跡遠景 北から



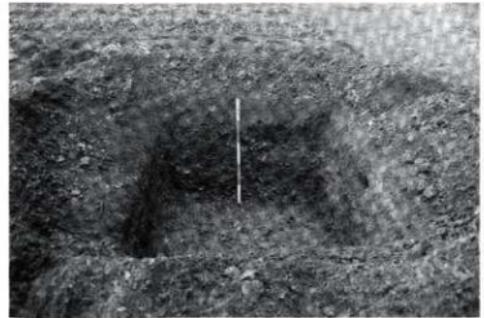
調査風景



調査風景



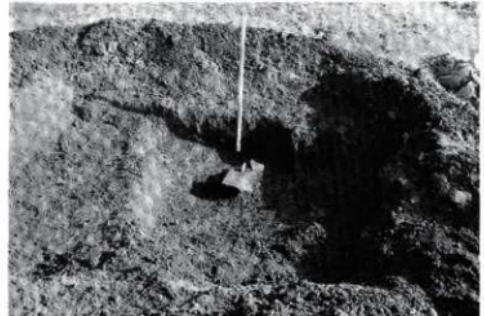
11トレンチ土層断面 南から



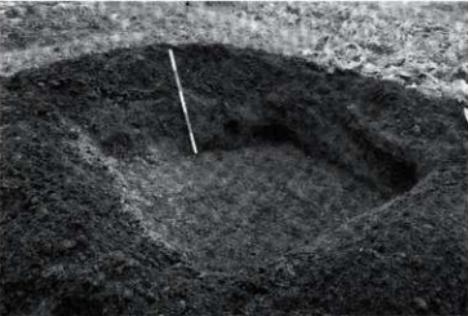
14トレンチ土層断面 南から



17トレンチ土層断面 北から



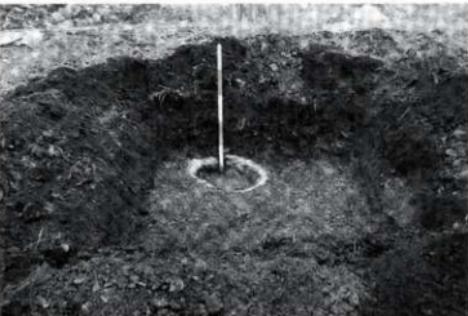
21トレンチ遺物出土状況 西から



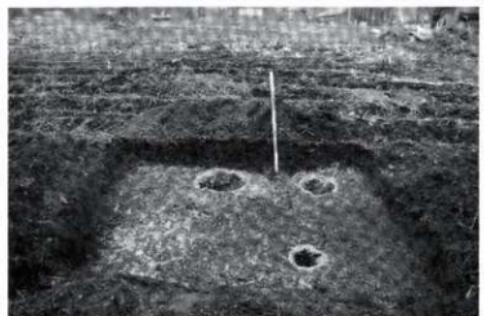
21トレンチ土層断面 東から



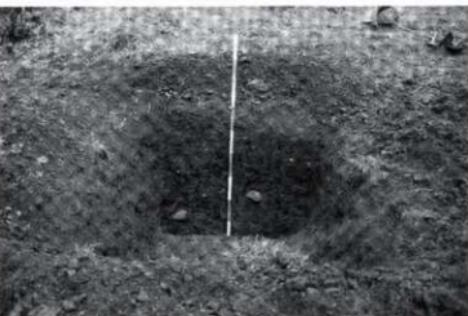
30トレンチ遺構検出状況 南から



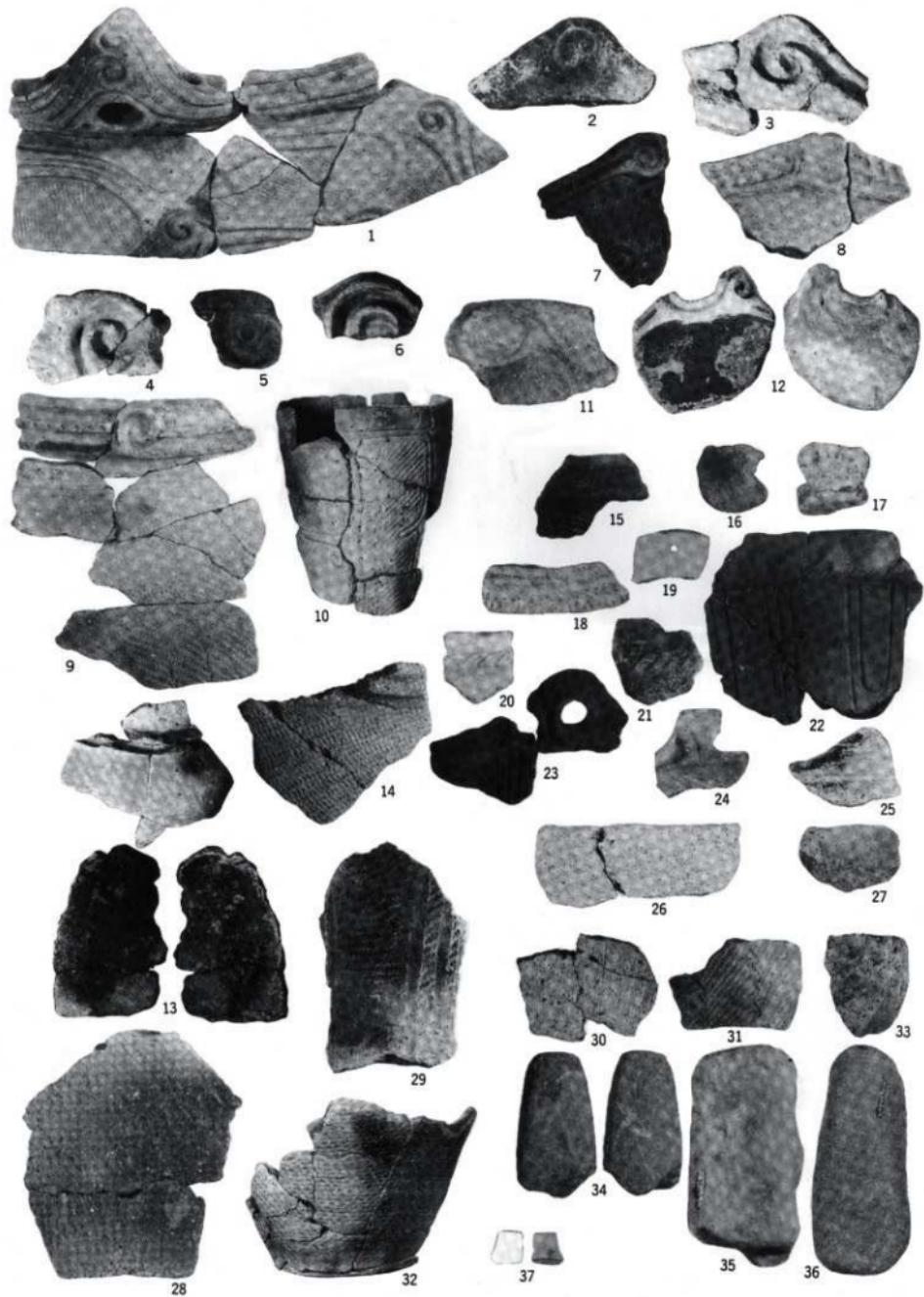
31トレンチ土層断面 南から



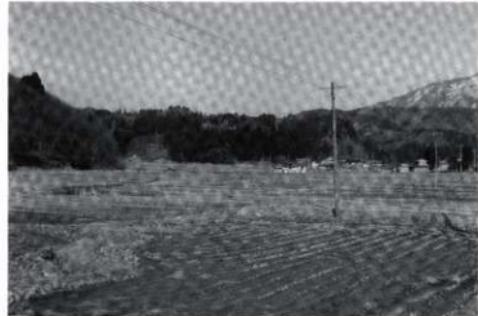
33トレンチ遺構検出状況 西から



38トレンチ土層断面 西から



蚊口太遺跡出土遺物



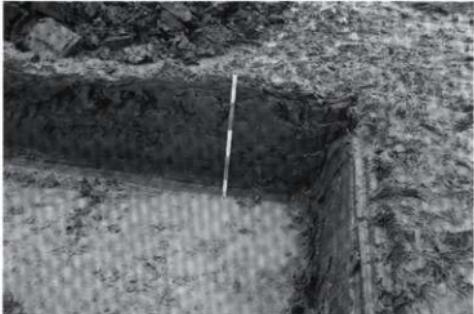
寺屋敷跡遠景 西から



調査風景



2トレンチ土層断面 東から



8トレンチ土層断面 東から



15トレンチ土層断面 南から



寺屋敷跡出土遺物



馬寄遺跡遠景 北から



馬寄遺跡近景 東から



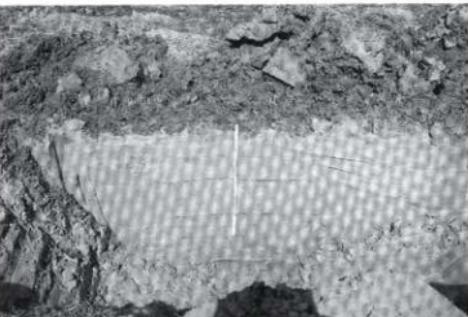
調査風景



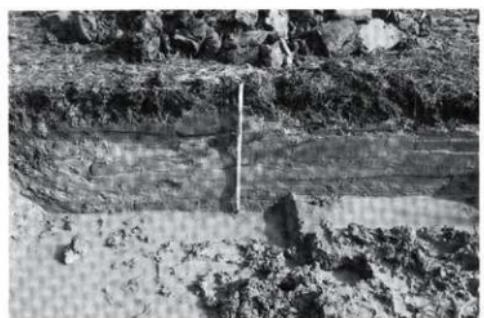
調査風景



4 トレンチ土層断面 東から



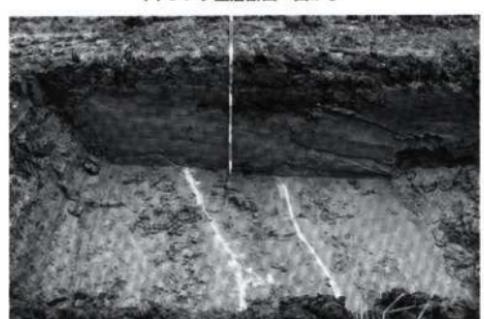
5 トレンチ土層断面 東から



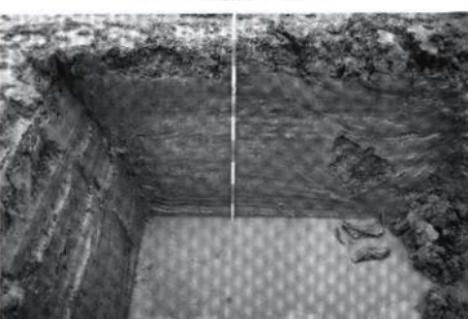
7 トレンチ土層断面 西から



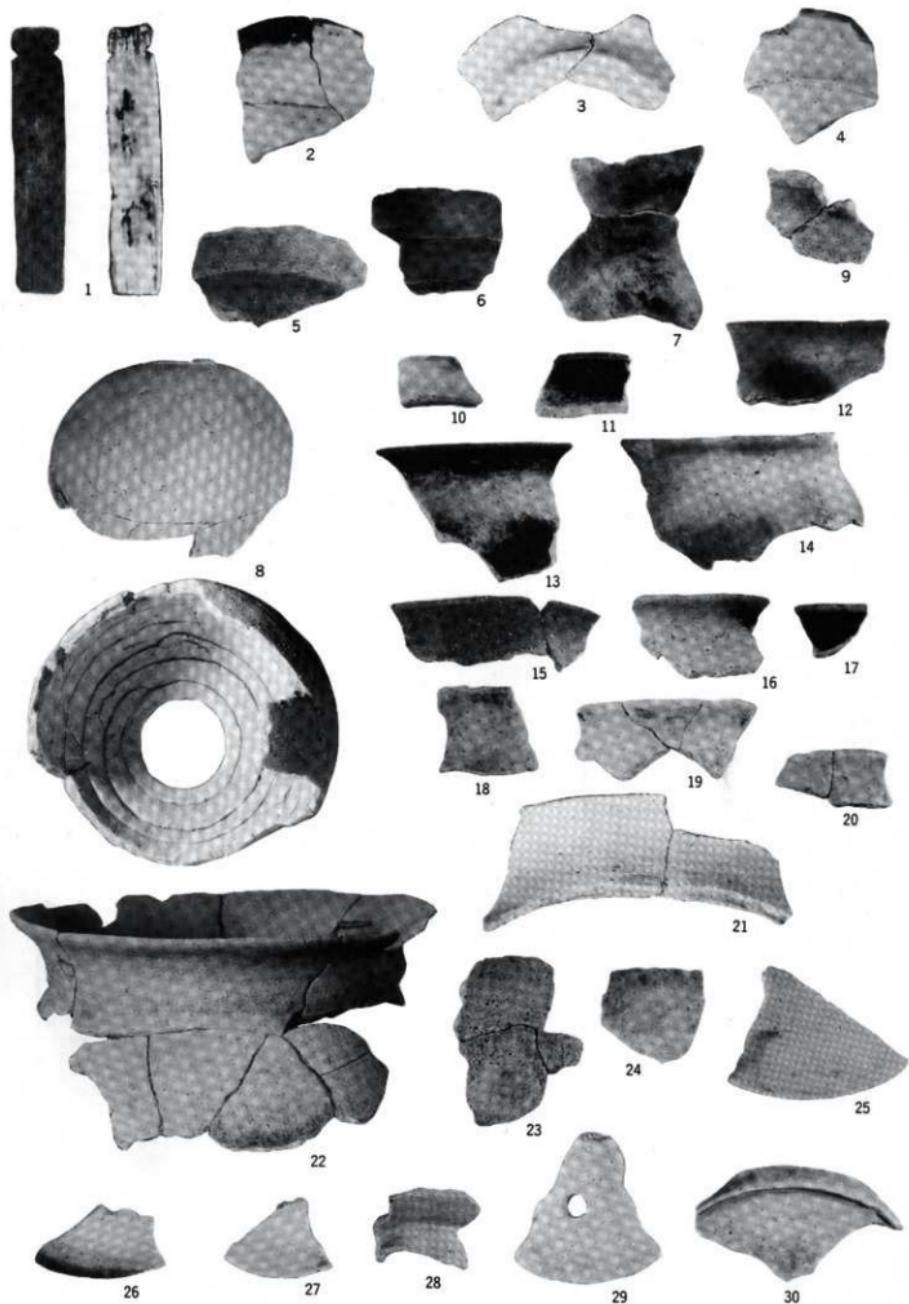
9 トレンチ土層断面 南から



10 トレンチ土層断面 東から



12 トレンチ土層断面 東から



報告書抄録

ふりがな	かもししないいせきかくにんちょうきはうごくしょ まながた ねにくら うまこし かぐちだ てらやしり うまよせいのせき							
書名	平成8年度加茂市内遺跡確認調査報告書 丸潟・鬼倉・馬越・蚊口太・寺屋敷・馬寄遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(7)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会							
所在地	〒959-13 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 ☎(0256)-52-0080							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査機関	調査面積 m ²	調査原因	
丸潟遺跡	加茂市大字加茂字丸潟2967-1ほか	15209	125	37度 39分 55秒	139度 2分 12秒	19960621～ 19960626	140	国道403号線 道路改良工事
鬼倉遺跡	加茂市大字下条字鬼倉2951-1ほか	15209	116	37度 39分 34秒	139度 1分 48秒	19960603～ 19960621	420	国道403号線 道路改良工事
馬越遺跡	加茂市大字下条字中谷地甲1664ほか	15209	117	37度 39分 6秒	139度 1分 36秒	19960613～ 19960620	280	国道403号線 道路改良工事
蚊口太遺跡	加茂市大字中大谷字升沢3441ほか	15209	69	37度 36分 48秒	139度 8分 6秒	19961210～ 19961221	270	県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業
寺屋敷跡	加茂市大字上大谷字飯山442ほか	15209	100	37度 37分 12秒	139度 8分 13秒	19970326～ 19970328	160	県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業
馬寄遺跡	加茂市大字加茂字馬寄2588-1ほか	15209	123	37度 39分 48秒	139度 2分 30秒	19970305～ 19970310	120	民間開発 (店舗建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
丸潟遺跡	包藏地	古墳時代		古式土師器				
鬼倉遺跡	包藏地	平安時代		土師器、須恵器		墨書き土器		
馬越遺跡	包藏地	平安時代		土師器、須恵器				
蚊口太遺跡	包藏地	繩文時代	ピット	繩文土器、磨製石斧		赤色物質付着土器		
寺屋敷跡	包藏地							
馬寄遺跡	包藏地	古墳・古代	溝	古式土師器、木簡		二つの遺構確認	面認	

発行日 平成9年3月31日

加茂市文化財調査報告書(7)

平成8年度 加茂市内遺跡確認調査報告書 丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡・蚊口太遺跡・寺屋敷跡・馬寄遺跡

発行者 加茂市教育委員会

新潟県加茂市幸町2丁目3番5号

☎ (0256)-52-0080

印刷所 小野坂印刷所

新潟県加茂市新町1丁目5番16号

☎ (0256)-52-0056